

【地域・産業】

生活環境評価およびまちづくり参画態度の構造化とその経年的な動向

－ 20年間の美浜町住民意識調査を通じて－

日本福祉大学国際福祉開発学部 教授
日本福祉大学知多半島総合研究所 所長 千頭 聡

1. 背景とねらい

我が国の少子・超高齢化はますます進行し、人口減少時代に突入している。一方で、市民の行政に対するニーズは多様化、高度化してきており、財政的な制約などの限られた行政資源を活用して、計画的で効果的・効率的な行政運営を行っていく必要性は非常に高まってきた。市町村の総合計画策定・改定時には、地域住民に対する意識調査を行い、その結果から、問題構造の明確化、住民ニーズの把握、市民と行政との協働の可能性などを明らかにするとともに、計画の達成目標として、住民意識に基づく指標づくりが盛んにおこなわれている。

各地で実施されている住民意識調査は、行政が単純集計あるいは性別、年齢別などのクロス集計を中心とした分析を行い報告書として公表しているが、生活環境に対する住民意識を構造的に分析した研究は必ずしも多くない。

松本幸正ら(2003)は、豊田市での市民意識調査から、住みよさに対する意識構造を数量化理論の結果を用いて明らかにするとともに、個々の生活環境要因に対する満足度と、その評価が住みよさの評価に及ぼす影響を同時に考慮したニーズ充足度及び改善必要度を算出している。また、小塚みすず(2009)は、全国での年代、職業、外出頻度などの個人属性が定住意識評価に与える影響について、数量化Ⅱ類を用いた分析を行っている。

これらの研究は、ひとつの意識調査結果をもとに分析したものがほとんどであるため、個々の結果に対する検定を行ったとしても、その分析結果が一定の時間経過にとともにどう変化していくのか、あるいは変化していかないのかについて、検証を行うことはできていない。

筆者らは、知多半島南部に位置する愛知県知多郡美浜町において、過去20年間に4回にわたり、住民を対象とした生活環境に関する意識調査を積み重ねてきた。この調査の中で、評価構造の経年的な変化や安定性を分析できるようにするため、いくつかの中心的な評価項目については共通化してきた。

本論文は、まず、「美浜町第五次総合計画」中間見直しに向けて、日本福祉大学まちづくり研究センターが美浜町から受託して行った「美浜町住民向けまちづくりアンケート調査」に基づき、身の回りの生活環境に対する現状の評価や今後の取り組みの重要性、地域への帰属意識やまちづくりに対する意識などについて分析を行い、生活環境に対する住民の意識評価やまちづくりへの参画態度の構造化を図るものである。

さらに、過去4回の住民意識調査結果に基づいて、これらの分析結果の経年的な動向

と評価構造の安定性および傾向を分析することを目的としている。

過年度の調査結果に基づく分析結果は、千頭聡ら(1999)、千頭聡ら(2003)、千頭聡ら(2012)にまとめられている。

2. 2019年度調査の分析

2.1 調査の概要

(1) 調査対象と調査方法

美浜町に住民票がある18歳以上の住民の中から、住民基本台帳を用いて、無作為に抽出した2,100名を対象として、調査表の郵送配布・郵送回収方式によりアンケートを実施した。調査時期は2019年7月である。

(2) 回収率

有効回収率は表1に示す通り、32.5%であった。なお、後述するように、回収率は過年度と比較してかなり低い結果となっている。

表1 配布数と有効回収数

発送数	2,100 通
有効回収数	682 通
有効回収率	32.5 %

2.2 回答者のフェースシート

(1) 性別、年齢、職業

回答者の主な属性は以下のとおりである。

① 性別

女性が回答者全体の約52.9%であり、男性よりもやや高い。

② 年齢

全体の約26%が60歳代、次いで50歳代が19%であり、回答者の年齢構成は全体として、やや高齢者に偏っている。

男女別にみた場合、年齢別構成にはほとんど差がない。

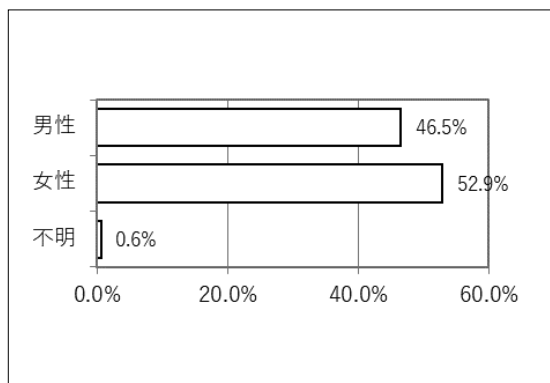


図1 回答者の性別

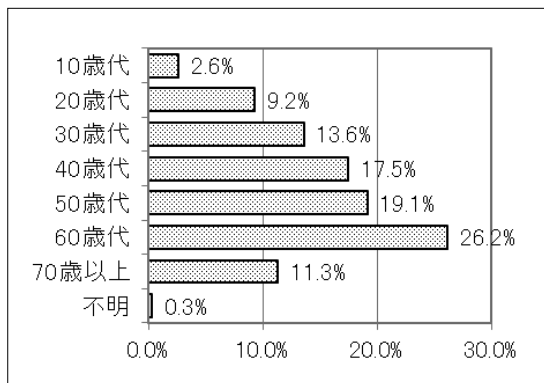


図2 回答者の年齢構成

表2 性別にみた回答者の年齢分布

問1性別	問2年齢									合計
	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	不明		
男性	6 1.9%	41 12.9%	38 12.0%	55 17.4%	57 18.0%	71 22.4%	49 15.5%	0 0.0%		317 100.0%
女性	6 1.7%	54 15.0%	66 18.3%	64 17.7%	52 14.4%	75 20.8%	43 11.9%	1 0.3%		361 100.0%
不明	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 25.0%	1 25.0%	1 25.0%	1 25.0%		4 100.0%
合計	12 1.8%	95 13.9%	104 15.2%	119 17.4%	110 16.1%	147 21.6%	93 13.6%	2 0.3%		682 100.0%

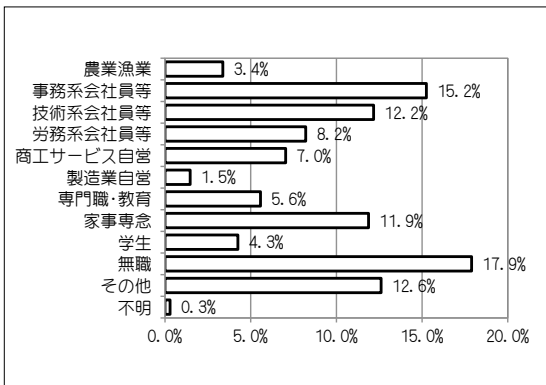


図3 回答者の職業

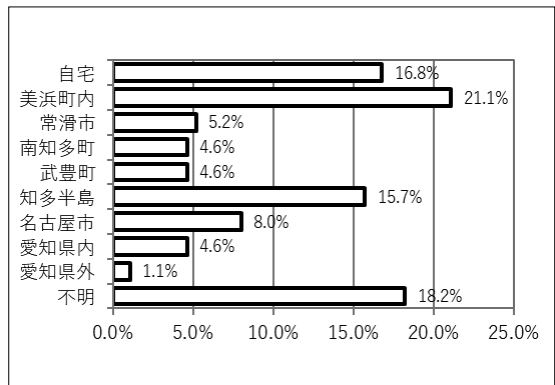


図4 通勤・通学先

③ 職業

回答者の職業は、無職が17.9%と最も多く、次いで、事務系会社員等が15.2%である。次いで事務系会社員等が15.2%である。事務系・技術系・労務系会社員等を合計すると35.6%と全体の1/3を超えている。美浜町の伝統的な基幹産業である農業及び漁業従事者はわずか3.4%に過ぎない。(図3)

無職以外と回答した人の通勤・通学先としては、町内が21.1%と最も多く、次いで自宅が16.8%である。近隣市町を含め、知多半島内の各市町への通勤・通学者は合わせて27.4%であり、名古屋市内への通勤・通学者は8.0%と非常に少ない。(図4)

会社員等および専門職・教育に就いている回答者の通勤地を上位三地域について示すと、事務系会社員等は、町内での就業が21.2%と最も多いのに対して、技術系会社員等は全体

表3 会社員等の主な通勤先

職業	通勤地		
	第一位	第二位	第三位
事務系会社員等	美浜町内 21.2%	知多半島 19.2%	名古屋市 15.4%
技術系会社員等	知多半島 27.7%	名古屋市 12.0%	愛知県内 12.0%
労務系会社員等	知多半島 30.4%	美浜町内 17.9%	常滑市 8.9%
専門職・教育	美浜町内 31.6%	知多半島 13.2%	武豊町 10.5%

の27.2%が、近隣市町以外の知多半島内に通勤している。労務系会社員等は、同じく近隣市町以外の知多半島内への通勤が30.4%と最も多く、次いで町内が7.9%である。専門職・教育については、町内が31.6%と最も多い。(表3)

(2) 居住地区

居住している小学校区は、河和学区が34.2%と最も多く、奥田学区・布土学区・野間学区・上野間学区はいずれも14%から15%程度である。河和南部学区は5.4%と少ない。

(図5)

(3) 家族および居住の状況

① 同居家族

配偶者を除く同居家族の状況を見ると、74歳以下の高齢者と同居している人が26.1%、75歳以上の高齢者との同居が18.5%に達している。(図6)

② 住まいの種類

住まいの形態は、全体の87.4%が戸建て持家であり、その他の住居は極めて少ない。

(図7)

③ 居住年数

居住年数は、全体の41.9%が30年以上である。

性別にみると、男性では全体の半数近い45.7%が30年以上と回答している。女性(39.1%)ではその比率はやや低いものの、全体の約6割の女性が20年以上の居住歴を持っている。

(図8)

また、生まれてからずっと町内に居住している人の割合は33.3%であり、転入者が全体の約半数を占めている。(図9)

④ 転入の理由

美浜町に移り住んだきっかけとしては、結婚が全体の35.4%と最も多い。(表4)

性別にみると、男性では就職・転勤と結婚がともに全体の約1/4であるのに対して、女性では44.6%が結婚である。(図10)(表5)

⑤ 美浜町の選択理由

美浜町を選んで理由としては、「先祖代々の土地がある」との回答が30.8%と最も多く、「住宅価格が手ごろ」との回答は14.7%である。

年代別にみると、ほぼすべての年代で、「先祖代々の土地がある」との回答が最も多いが、60歳代以上では、「豊かな自然環境」を理由としてあげる人もやや多くなっている。

(図11)(表6)

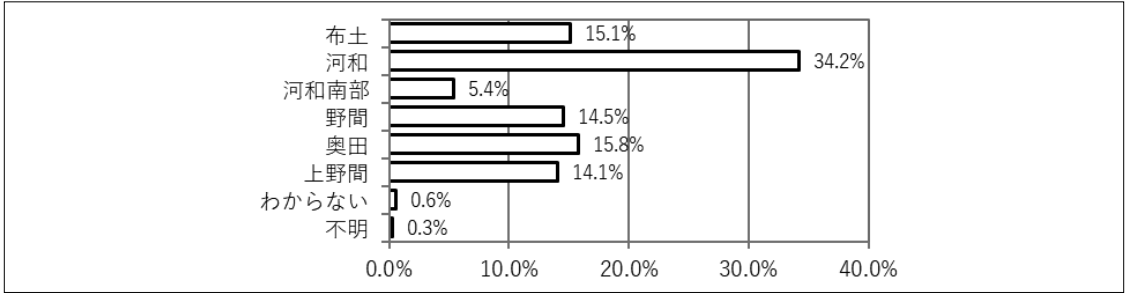


図5 居住地区

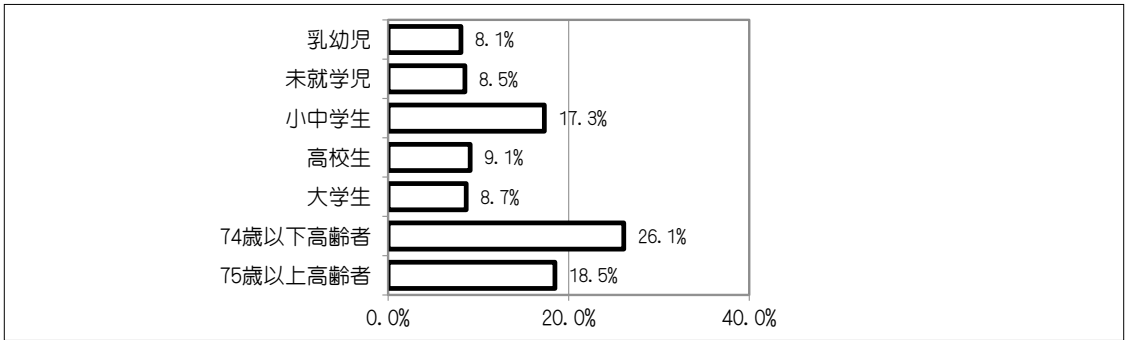


図6 同居家族

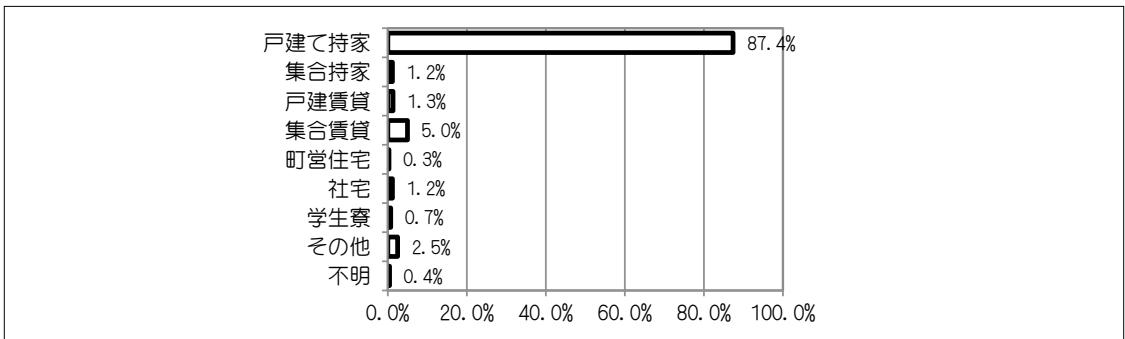


図7 住まいの種類

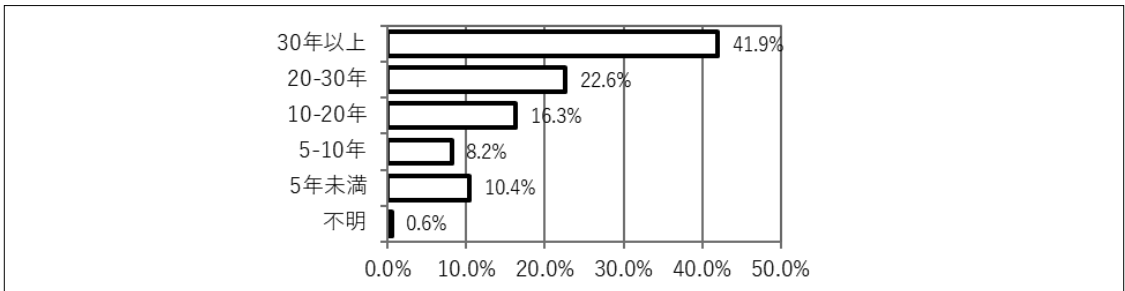


図8 居住年数

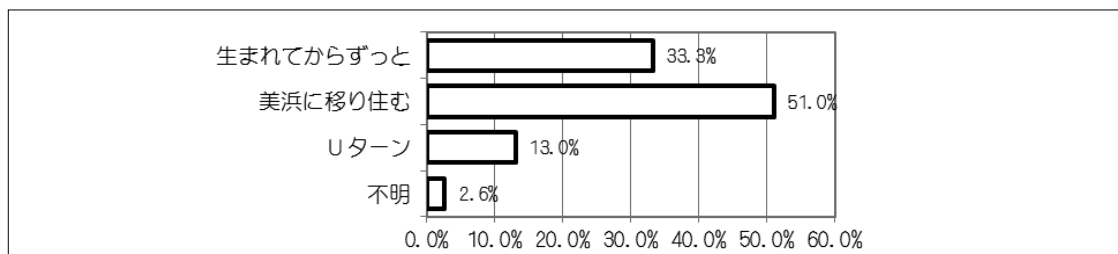


図9 町内での居住歴

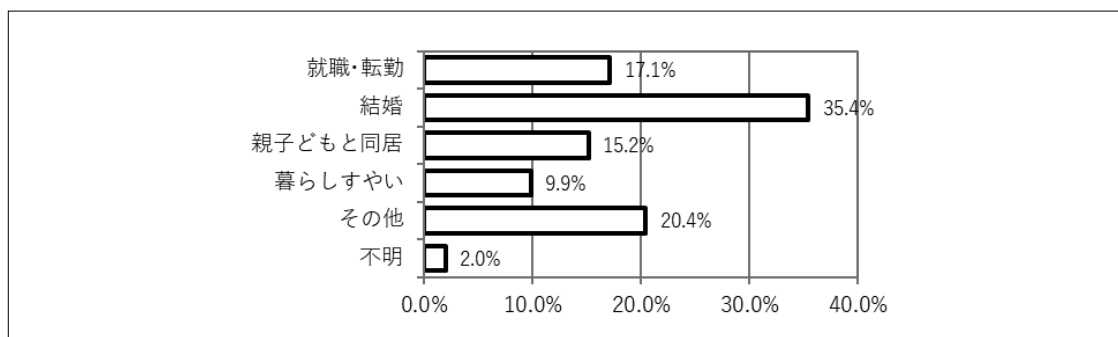


図10 転入理由

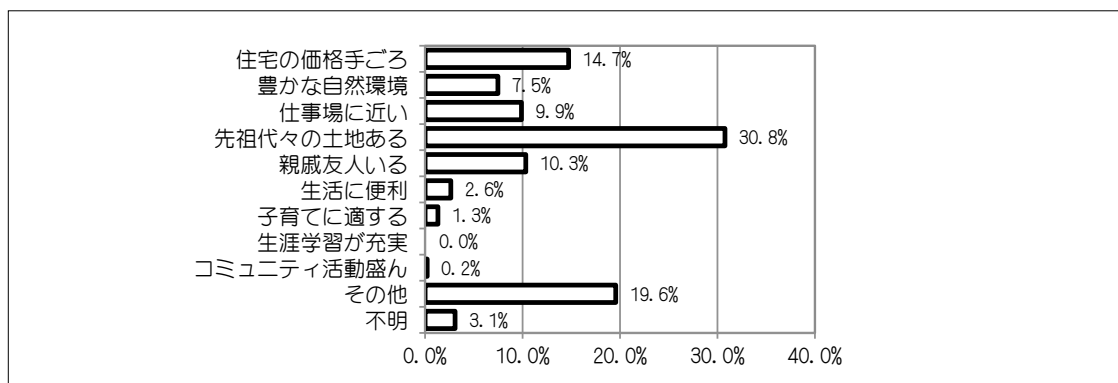


図11 転入時の美浜町選択理由

表4 性別にみた居住年数

問1性別	問8居住年数						合計
	30年以上	20-30年	10-20年	5-10年	5年未満	不明	
男性	145 45.7%	79 24.9%	48 15.1%	17 5.4%	26 8.2%	2 0.6%	317 100.0%
女性	141 39.1%	74 20.5%	62 17.2%	39 10.8%	44 12.2%	1 0.3%	361 100.0%
不明	0 0.0%	1 25.0%	1 25.0%	0 0.0%	1 25.0%	1 25.0%	4 100.0%
合計	286 41.9%	154 22.6%	111 16.3%	56 8.2%	71 10.4%	4 0.6%	682 100.0%

表5 性別、年齢別にみた転入のきっかけ

問1性別	問10-1転入のきっかけ						合計
	就職・転勤	結婚	親子どもと同居	暮らしすやい	その他	不明	
男性	47 24.4%	45 23.3%	36 18.7%	27 14.0%	33 17.1%	5 2.6%	193 100.0%
女性	31 12.0%	115 44.6%	32 12.4%	18 7.0%	59 22.9%	3 1.2%	258 100.0%
不明	0 0.0%	1 25.0%	1 25.0%	0 0.0%	1 25.0%	1 25.0%	4 100.0%
合計	78 17.1%	161 35.4%	69 15.2%	45 9.9%	93 20.4%	9 2.0%	455 100.0%

問2年齢	問10-1転入のきっかけ						合計
	就職・転勤	結婚	親子どもと同居	暮らしすやい	その他	不明	
10歳代	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	2 100.0%
20歳代	9 20.5%	11 25.0%	4 9.1%	3 6.8%	12 27.3%	5 11.4%	44 100.0%
30歳代	9 12.5%	29 40.3%	11 15.3%	5 6.9%	18 25.0%	0 0.0%	72 100.0%
40歳代	18 19.1%	28 29.8%	19 20.2%	10 10.6%	19 20.2%	0 0.0%	94 100.0%
50歳代	18 22.8%	31 39.2%	8 10.1%	9 11.4%	13 16.5%	0 0.0%	79 100.0%
60歳代	15 14.2%	42 39.6%	20 18.9%	11 10.4%	17 16.0%	1 0.9%	106 100.0%
70歳以上	9 16.1%	20 35.7%	6 10.7%	7 12.5%	13 23.2%	1 1.8%	56 100.0%
不明	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 50.0%	1 50.0%	2 100.0%
合計	78 17.1%	161 35.4%	69 15.2%	45 9.9%	93 20.4%	9 2.0%	455 100.0%

表6 性別・年齢別に見た転入理由

問1性別	問10-2転入理由										合計	
	住宅の価格手ごろ	豊かな自然環境	仕事場に近しい	先祖代々の土地がある	親戚友人がいる	生活に便利	子育てに適する	生涯学習が充実	コミュニティ活動盛ん	その他		不明
男性	32 16.6%	16 8.3%	19 9.8%	60 31.1%	20 10.4%	4 2.1%	3 1.6%	0 0.0%	1 0.5%	34 17.6%	4 2.1%	193 100.0%
女性	35 13.6%	18 7.0%	26 10.1%	77 29.8%	27 10.5%	8 3.1%	3 1.2%	0 0.0%	0 0.0%	55 21.3%	9 3.5%	258 100.0%
不明	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 75.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 25.0%	4 100.0%
合計	67 14.7%	34 7.5%	45 9.9%	140 30.8%	47 10.3%	12 2.6%	6 1.3%	0 0.0%	1 0.2%	89 19.6%	14 3.1%	455 100.0%

問1性別	問10-2転入理由										合計	
	住宅の価格手ごろ	豊かな自然環境	仕事場に近しい	先祖代々の土地がある	親戚友人がいる	生活に便利	子育てに適する	生涯学習が充実	コミュニティ活動盛ん	その他		不明
10歳代	1 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	2 100.0%
20歳代	8 18.2%	2 4.5%	8 18.2%	4 9.1%	7 15.9%	0 0.0%	1 2.3%	0 0.0%	0 0.0%	10 22.7%	4 9.1%	44 100.0%
30歳代	11 15.3%	5 6.9%	7 9.7%	22 30.6%	11 15.3%	3 4.2%	1 1.4%	0 0.0%	0 0.0%	12 16.7%	0 0.0%	72 100.0%
40歳代	14 14.9%	4 4.3%	8 8.5%	30 31.9%	9 9.6%	4 4.3%	1 1.1%	0 0.0%	0 0.0%	23 24.5%	1 1.1%	94 100.0%
50歳代	17 21.5%	5 6.3%	7 8.9%	27 34.2%	6 7.6%	1 1.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	14 17.7%	2 2.5%	79 100.0%
60歳代	9 8.5%	11 10.4%	9 8.5%	44 41.5%	8 7.5%	2 1.9%	1 0.9%	0 0.0%	0 0.0%	20 18.9%	2 1.9%	106 100.0%
70歳以上	7 12.5%	7 12.5%	6 10.7%	13 23.2%	6 10.7%	2 3.6%	2 3.6%	0 0.0%	1 1.8%	9 16.1%	3 5.4%	56 100.0%
不明	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 50.0%	1 50.0%	2 100.0%
合計	67 14.7%	34 7.5%	45 9.9%	140 30.8%	47 10.3%	12 2.6%	6 1.3%	0 0.0%	1 0.2%	89 19.6%	14 3.1%	455 100.0%

2.3 生活環境に対する評価

(1) 満足度および重要度

生活環境を示す項目として、WHOの考え方などに基づいて、過年度調査と同様に、「自然快適性」「利便性」「安全性」「文化性」の4つの視点を設定し、それぞれの視点ごとに、総合評価および6から8つの評価項目、全体で32項目に対して、5段階評価で回答を求めた。

設問としては、それぞれの項目に対する現状の満足度を聞くとともに、これからの施策としての重要度を聞いた。(図12)

その結果をもとに、「非常に満足」「非常に重要」をプラス2点、「かなり不満」「重要でない」をマイナス2点として点数化して整理したものが、図14から図16である。

満足度については、最も評価が高い項目は「自然の豊かさ」(0.60)であり、「町の静けさ」(0.5)4、「空気のきれいさ」(0.45)など、自然環境や快適性に関する項目の評価が高い。一方、最も評価が低い項目は「電化製品の買い物」(-0.79)であり、「夜間の安全性」や「津波・高潮に対する安全性」も評価が-0.4以下となっている。

重要度については、「津波・高潮に対する安全性」が1.80と最も重要だと評価されており、次いで、「医療施設」「道路の安全性」「日用品の買い物」なども重要だと認識されている。一方、「地区のシンボル」「歴史を感じる場所」などに対しては重要だと考える回答者が少なくなっている。

性別にみると、「夜間の安全性」「津波・高潮に対する安全性」「医療施設」については女性の評価が男性よりも顕著に低くなっており、「電化製品の買い物」についても同様の傾向がみられる。全体として女性の評価が男性よりも低い。重要度については、「津波・高潮に対する安全性」をはじめとした安全性に関わる項目に対しては、男性よりも女性の方が重要だと考えている。また全体としても女性の方が男性よりも重要度が高い傾向がみられる。

現状の満足度と重要度を2軸上にプロットすると、「空気のきれいさ」「土砂崩れに対する安全性」「自然・快適性総合評価」は、右上の第一象限に位置しており、現状の評価が高く、かつ、今後も重要だと評価されている。一方、左上の第二三象限に位置し、現状の満足度が低いにも関わらず今後重要だと考えられている項目としては、「津波・高潮に対する安全性」「夜間の安全性」「交通の便」などが挙げられており、特に安全性に関わる項目に対する今後の対応が必要であることがわかる。(図13、14、15、16)

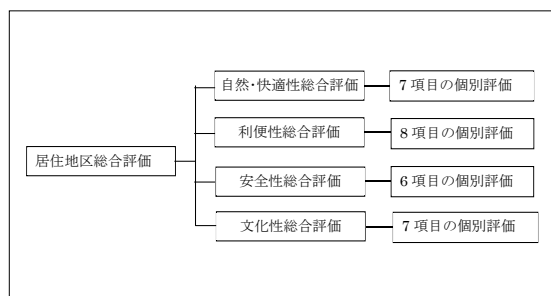


図12 生活環境評価項目の体系

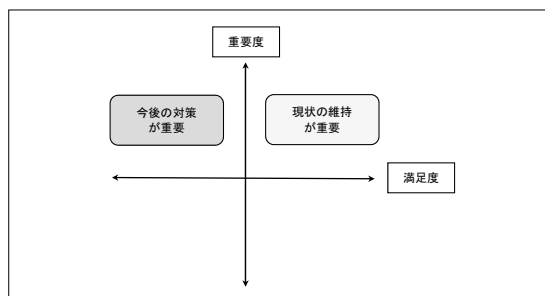


図13 満足度と重要度からみた対応の考え方

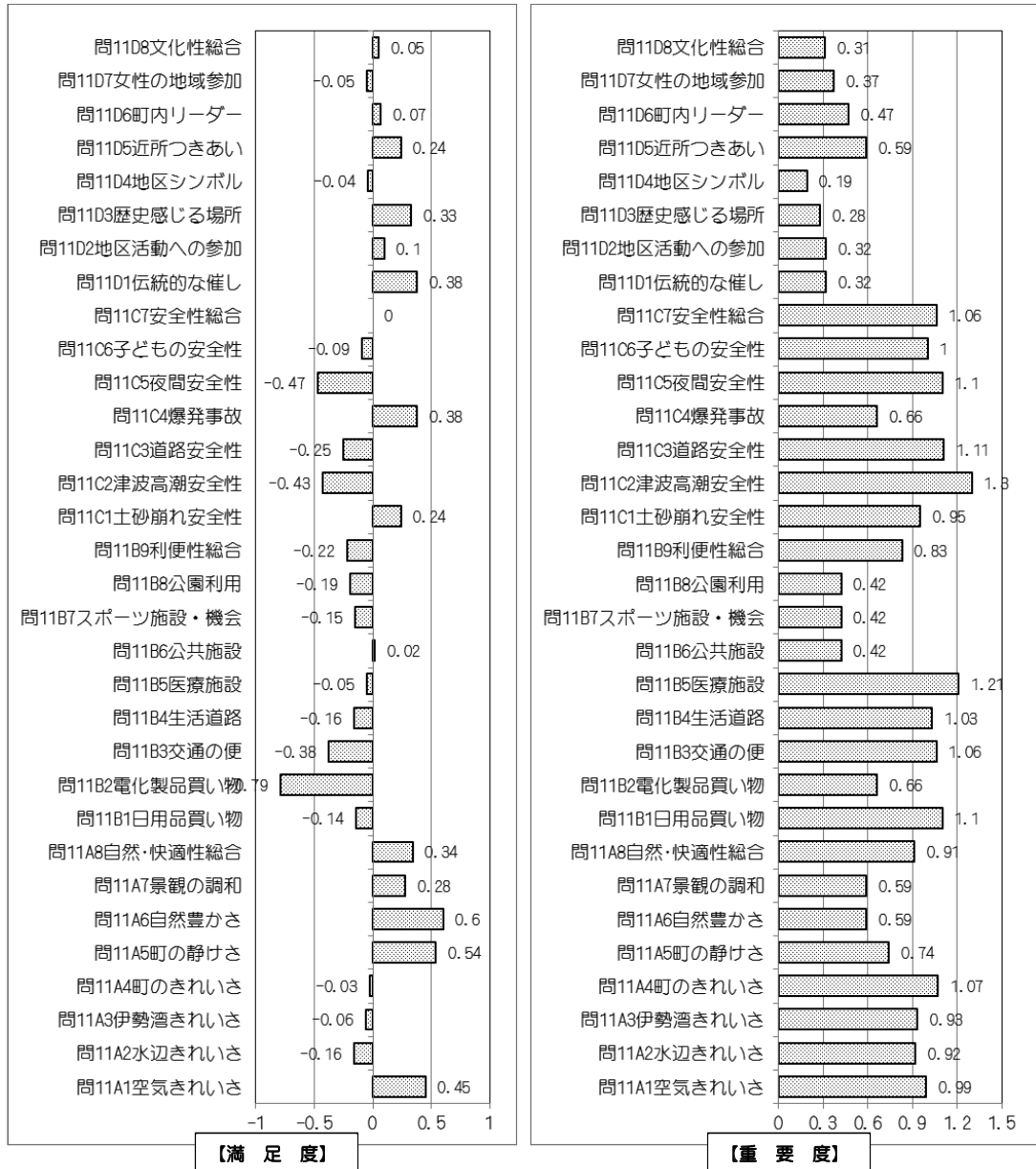


図 14 生活環境に対する満足度と重要度

注：5段階評価を +2 ～ -2 に変換して計算

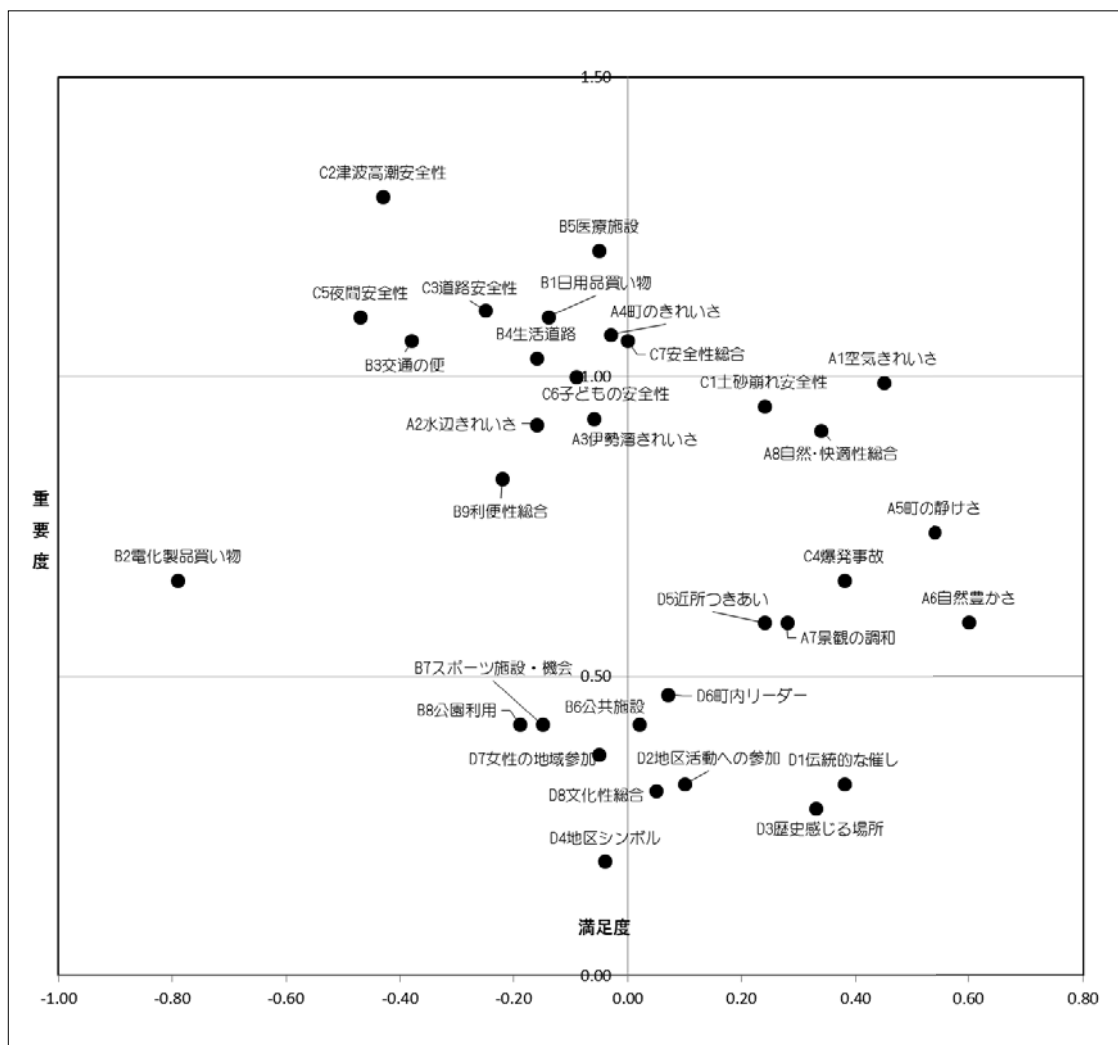


図 15 満足度と重要度からみた生活環境項目の位置づけ

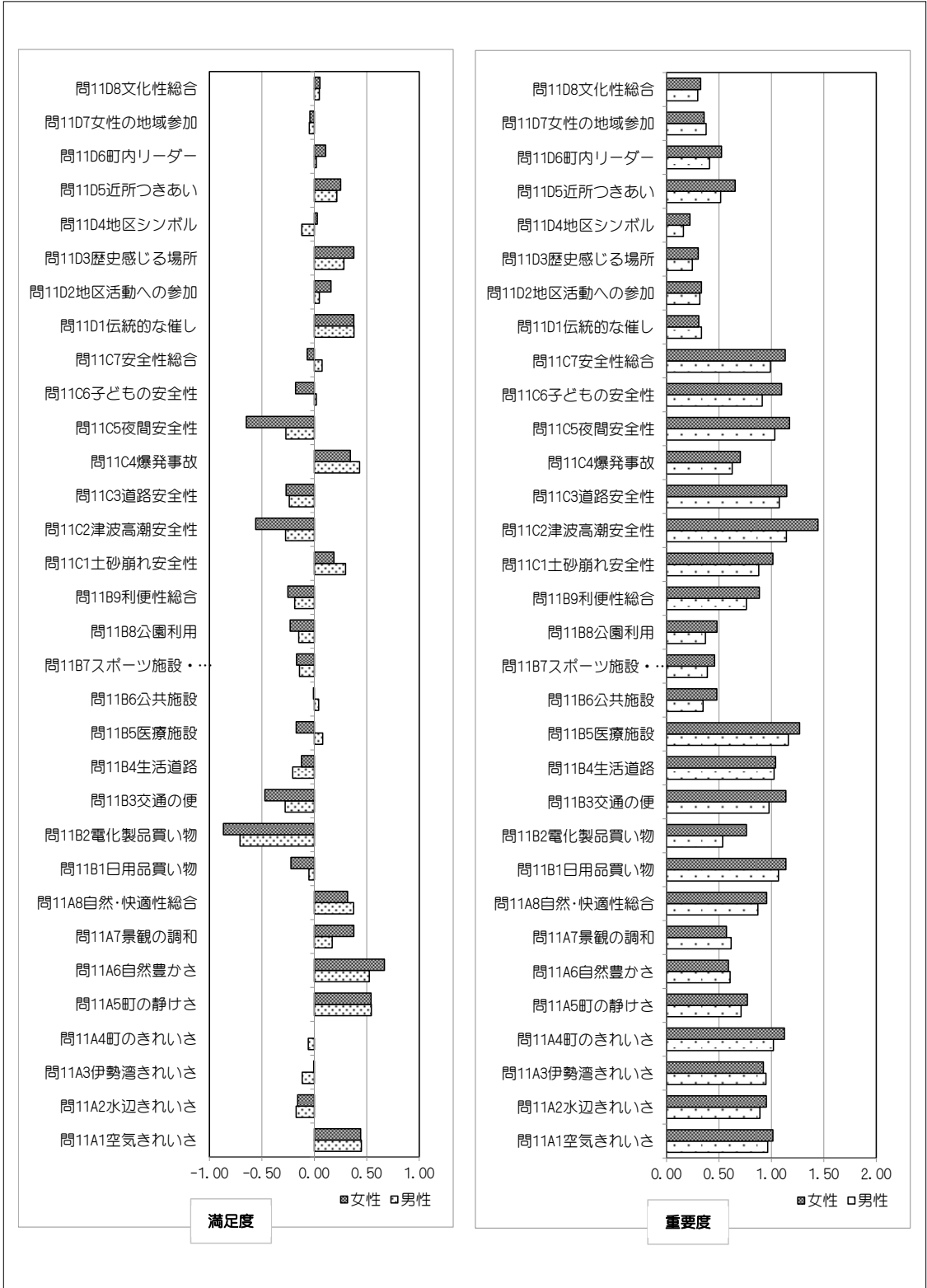


図 16 性別にみた生活環境に対する満足度と重要度

2.4 数量化Ⅱ類を用いた生活環境評価の構造化

自然性・快適性、利便性、安全性、文化性の4つの視点ごとに、総合評価を外的基準、各評価項目を説明指標として、数量化Ⅱ類を用い、外的基準(生活環境の総合的な満足度)に対して、どの項目(アイテム)の評価結果が大きな影響を及ぼしているかを分析した。たとえば、自然性・快適性については、「自然性・快適性総合評価」を外的基準として、「空気のきれいさ」などの7項目の個別評価が、総合評価にどのように影響しているかを分析するものである。なお、分析にあたっては、5段階で評価された意識調査結果を3段階に集約してデータ処理している。

(1) 自然・快適性

自然・快適性に関する数量化Ⅱ類に基づく寄与率を表7に示す。第一軸の寄与率が0.693と高いため、カテゴリースコアならびにレンジは第一軸についてのみ示している。なお、各選択肢(カテゴリー)のスコアのマイナスであるほど、総合的には満足度のプラス評価に寄与することになっている。

表7 自然・快適性に関わる寄与率

相関比	寄与率	累積寄与率
0.502	72.9%	72.9%
0.187	27.1%	100.0%

各カテゴリーのスコアを図17に示す。また、各アイテムのレンジを図18にまとめて示す。

各カテゴリーのスコアを見ると、総合評価に最もプラスに寄与しているのは「景観の調和(満足)」(-0.520)であり、次いで「町の静けさ(満足)」(-0.211)、「空気のきれいさ(満足)」(-0.194)である。これらに対する満足度が総合評価の満足度に大きく寄与していることがわかる。

一方、総合評価にマイナスに寄与しているものは、「景観の調和(不満)」(0.919)が最も大きく、「自然の豊かさ(不満)」(0.677)、「町の静けさ(不満)」(0.556)なども、総合的な不満度に大きく寄与している。

アイテムごとのカテゴリースコアの大きさを比較すると、「景観の調和」が1.438と最も大きく景観の調和に対する評価(満足あるいは不満)が、自然性・快適性の総合的な評価に最も影響を及ぼしていることがわかる。次いで「空気のきれいさ」(0.834)、「町の静けさ」(0.767)が次いでいる。

(2) 利便性

利便性に関する数量化Ⅱ類に基づく寄与率を表8に示す。第一軸の寄与率が0.729と高いため、カテゴリースコアならびにレンジは第一軸についてのみ示している。なお、利便性については、各選択肢(カテゴリー)

表8 利便性に関わる寄与率

相関比	寄与率	累積寄与率
0.502	72.9%	72.9%
0.187	27.1%	100.0%

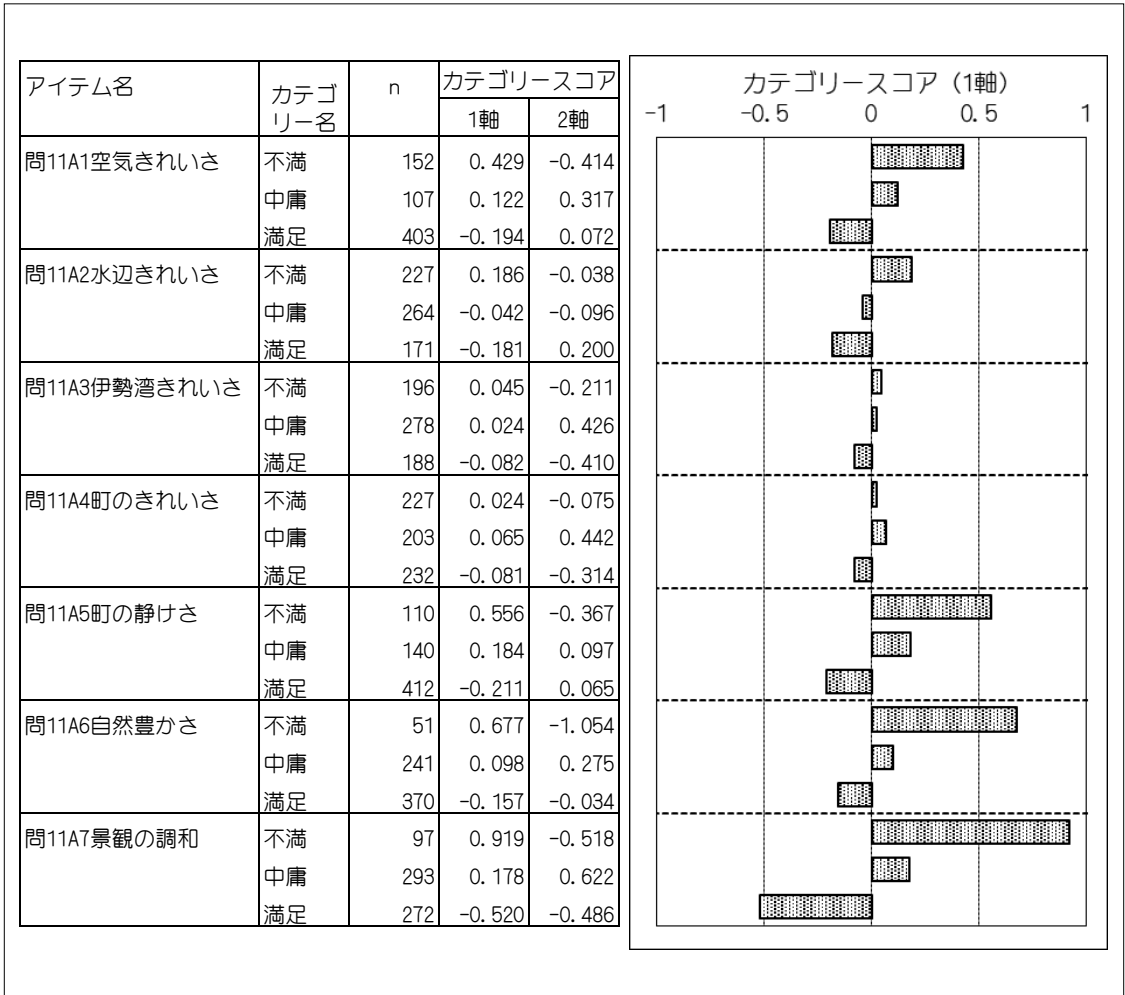


図 17 自然性・快適性に関わる数量化Ⅱ類による分析結果

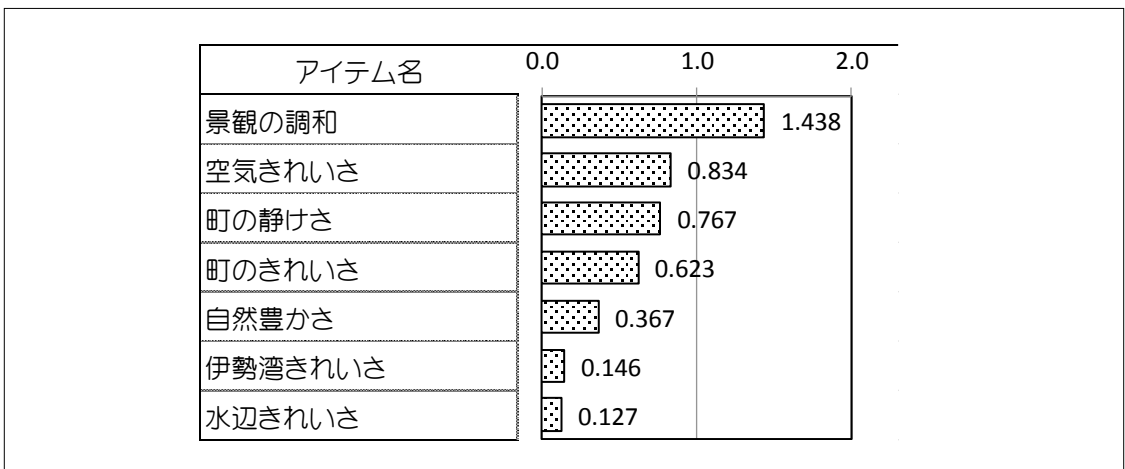


図 18 自然性・快適性に関わる数量化Ⅱ類によるレンジ

のスコアがマイナスであるほど、総合的にはプラス評価に寄与することになっている。

各カテゴリーのスコアを図19に示す。また、各アイテムのレンジを図20にまとめて示す。

各カテゴリーのスコアを見ると、総合評価に最もプラスに寄与しているのは「公園の利用(満足)」(-0.377)であり、次いで「交通の便(満足)」(-0.346)「生活道路(満足)」(-0.342)である。これらに対する満足度が総合評価の満足度に大きく寄与していることがわかる。

一方、総合評価にマイナスに寄与しているものは、「公園の利用(不満)」(0.383)が最も大きく、「日用品の買い物(不満)」(0.331)、「生活道路(不満)」(0.280)なども、総合的な不満度に大きく寄与している。

アイテムごとのカテゴリースコアの大きさを比較すると、「公園利用」が0.760と最も大きく、公園利用に対する評価(満足あるいは不満)が、利便性の総合的な評価に最も影響を及ぼしていることがわかる。次いで「生活道路」(0.622)、「日用品の買い物」(0.601)が次

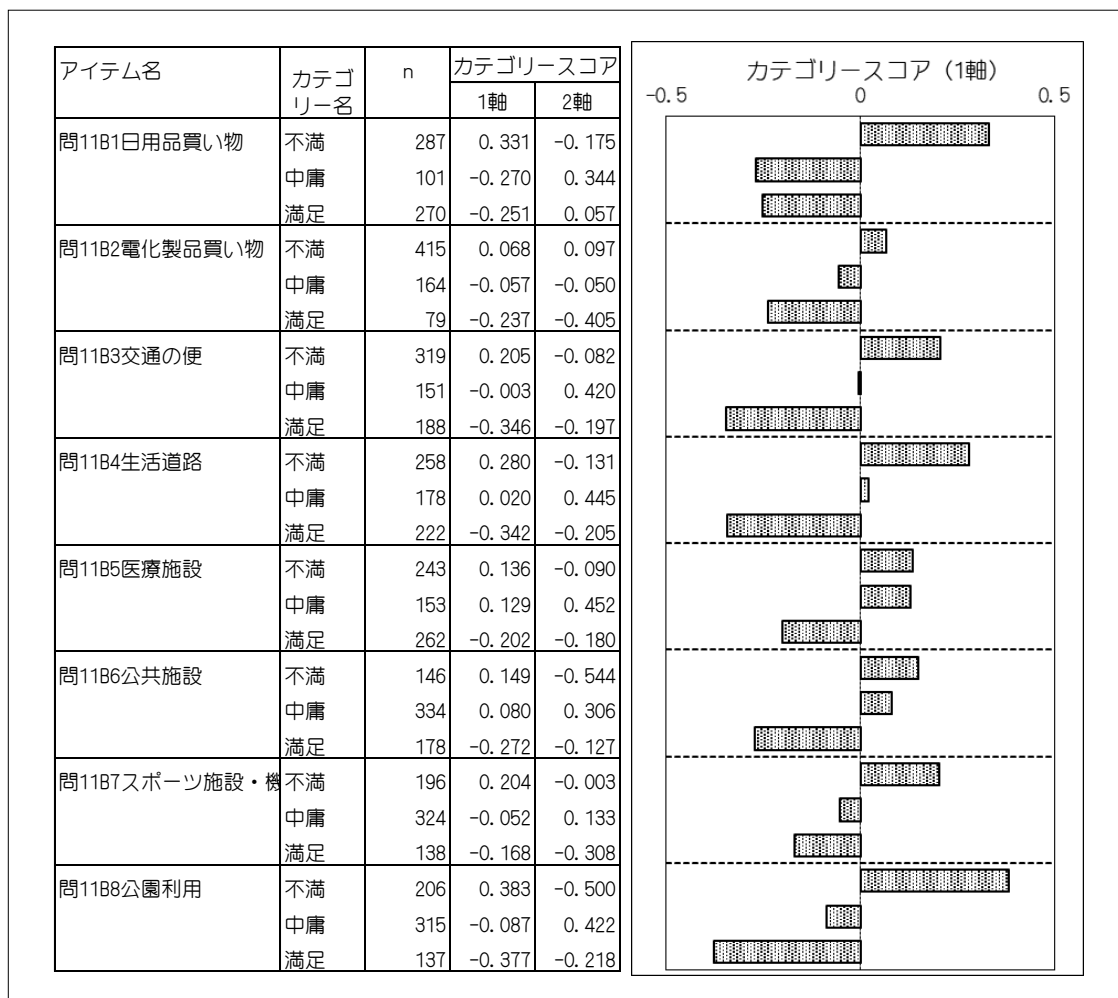


図19 利便性に関わる数量化Ⅱ類による分析結果

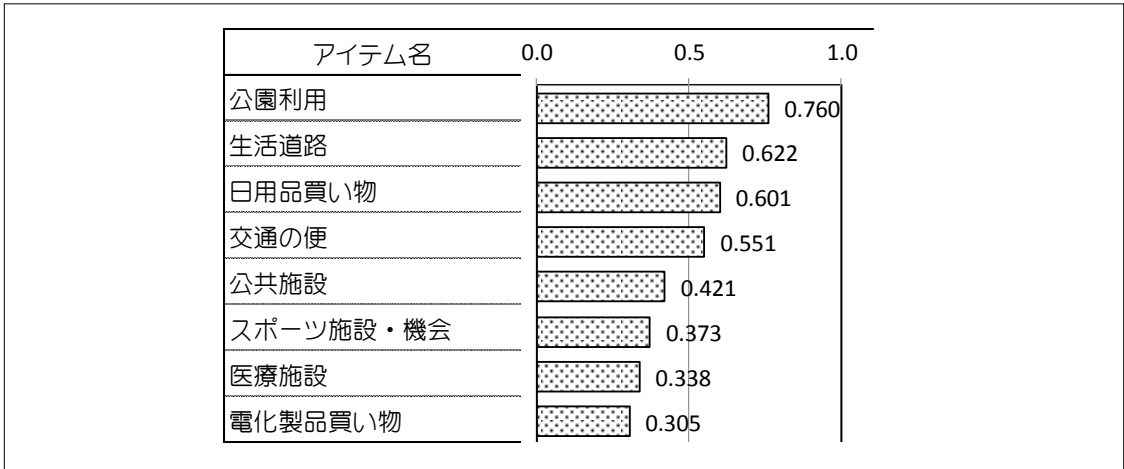


図 20 利便性に関わる数量化Ⅱ類によるレンジ

いでいる。

(3) 安全性

安全性に関する数量化Ⅱ類に基づく分析結果を表9に示す。第一軸の寄与率が0.726と高いため、カテゴリースコアならびにレンジの算出は第一軸についてのみ示している。なお、安全性については、各選択肢(カテゴリー)のスコアがマイナスであるほど、総合的にはプラス評価に寄与することになっている。

表 9 安全性に関わる寄与率

相関比	寄与率	累積寄与率
0.502	72.9%	72.9%
0.187	27.1%	100.0%

各カテゴリーのスコアを図21に示す。また、各アイテムのレンジは図22にまとめて示している。

カテゴリースコアをみると、総合的な満足度に最もプラスに寄与しているカテゴリーは「子どもの安全性(満足)」(-0.823)であり、次いで、「夜間の安全性(満足)」(-0.563)も安全性の評価に大きくつながっていることがわかる。「道路の安全性(満足)」(-0.316)も比較的寄与度が高い。

一方、不満足側に寄与しているカテゴリーとしては「子どもの安全性(不満)」(0.428)が最も大きい。次いで、「爆発事故(不満)」(0.282)、「道路の安全性(不満)」(0.279)も総合評価の満足度を押し下げる要因となっている。「夜間の安全性(不満)」(0.242)も比較的寄与の大きな要因である。

アイテムごとのカテゴリースコアの大きさを比較すると、「子どもの安全性」が1.250と最も大きく、子どもの安全性に対する評価(満足あるいは不満)が、安全性の総合的な評価に最も影響を及ぼしていることがわかる。次いで「夜間の安全性」(0.804)、「道路安全性」(0.595)が次いでいる。「爆発事故」については、「爆発事故(不満)」(0.282)は総合評価をマイナスに押し下げているが、「爆発事故(満足)」(-0.200)は総合評価のプラスに強くは関

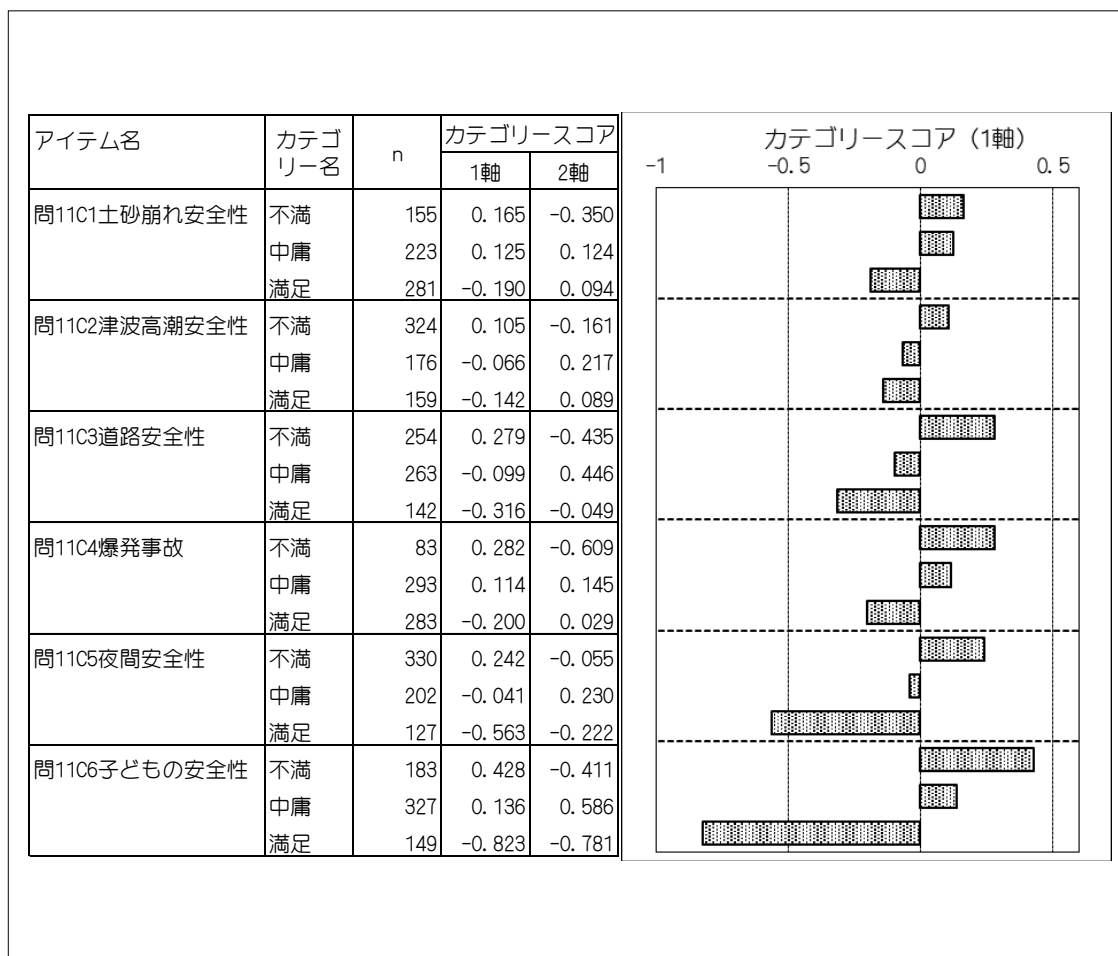


図 21 安全性に関わる数量化Ⅱ類による分析結果

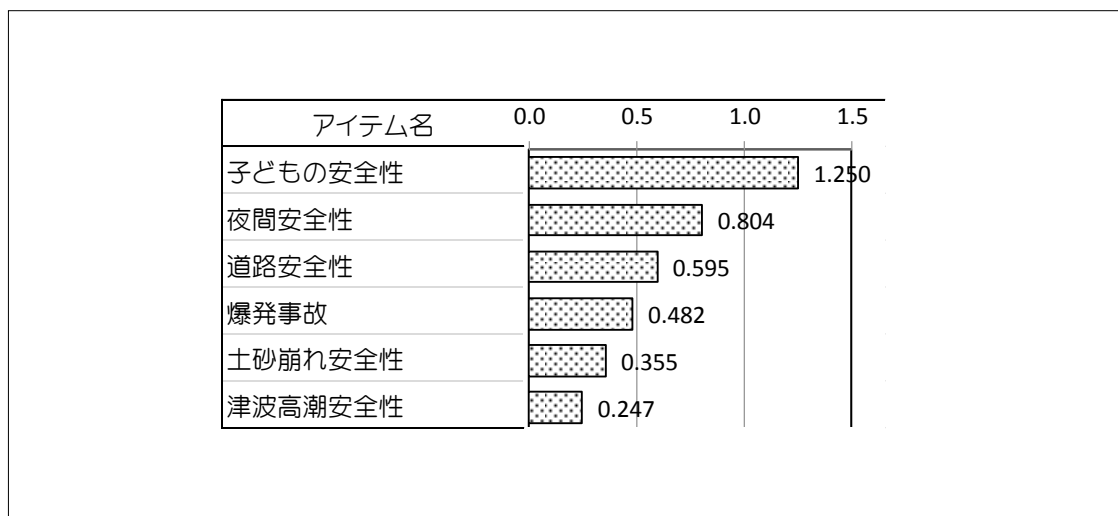


図 22 安全性に関わる数量化Ⅱ類によるレンジ

わっていないため、レンジとしては比較的小さくなっている。

(4) 文化性

文化性に関する数量化Ⅱ類に基づく分析結果を表10に示す。第一軸の寄与率は0.599であり、他の視点と比較して寄与率はやや低いが、0.5を超

表 10 文化性に関わる寄与率

相関比	寄与率	累積寄与率
0.479	59.9%	59.9%
0.321	40.1%	100.0%

えていることから、ここでは、カテゴリースコアならびにレンジは、他の視点と同様に第一軸についてのみ示している。なお、安全性については、各選択肢(カテゴリー)のスコアもプラスであるほど、総合的にはプラス評価に寄与することになっている。

各カテゴリーのスコアを図23に示す。また、各アイテムのレンジは図24にまとめて示している。

カテゴリースコアをみると、文化性にかかわる総合評価に最もプラスに影響しているのは、「女性の地域参加のしやすさ(満足)」(0.968)であり、他のアイテムと比較して、非常に強く意識されていることがわかる。つまり、女性が地域活動に参加しやすいと評価している人は、文化性全体に対しても高く評価していることとなる。「町内のリーダーの存在(満足)」(0.571)も比較的寄与度が大きい。

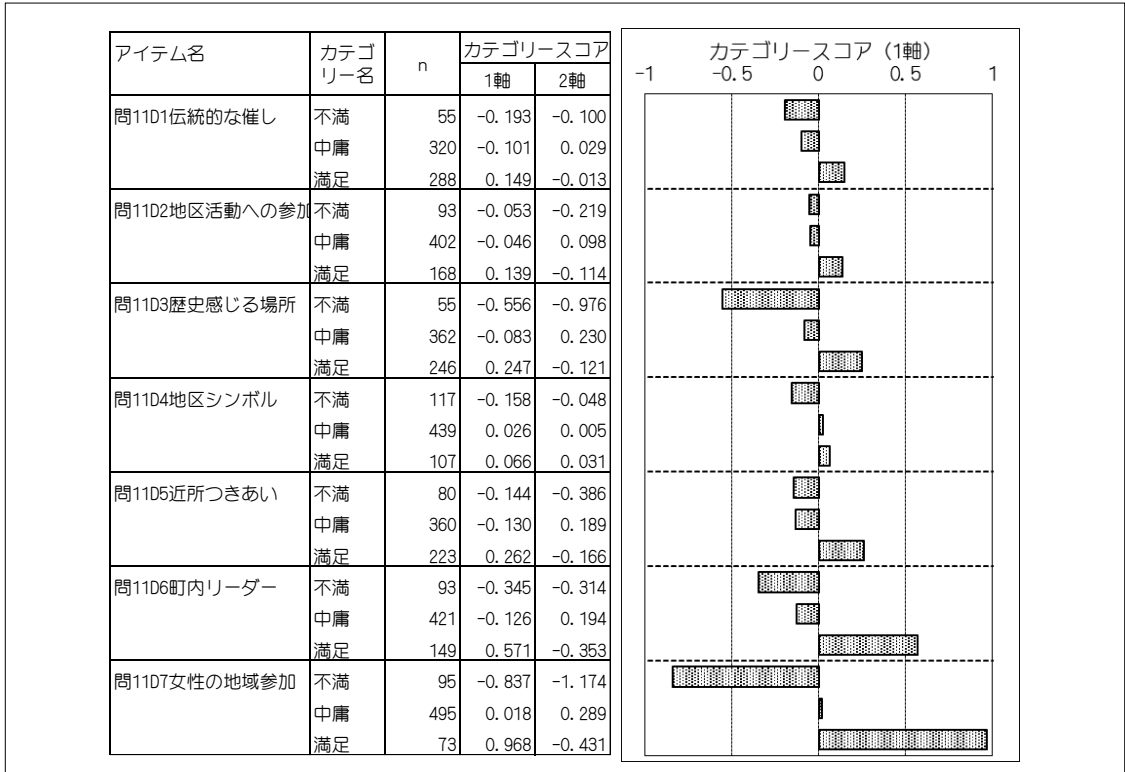


図 23 文化性に関わる数量化Ⅱ類による分析結果

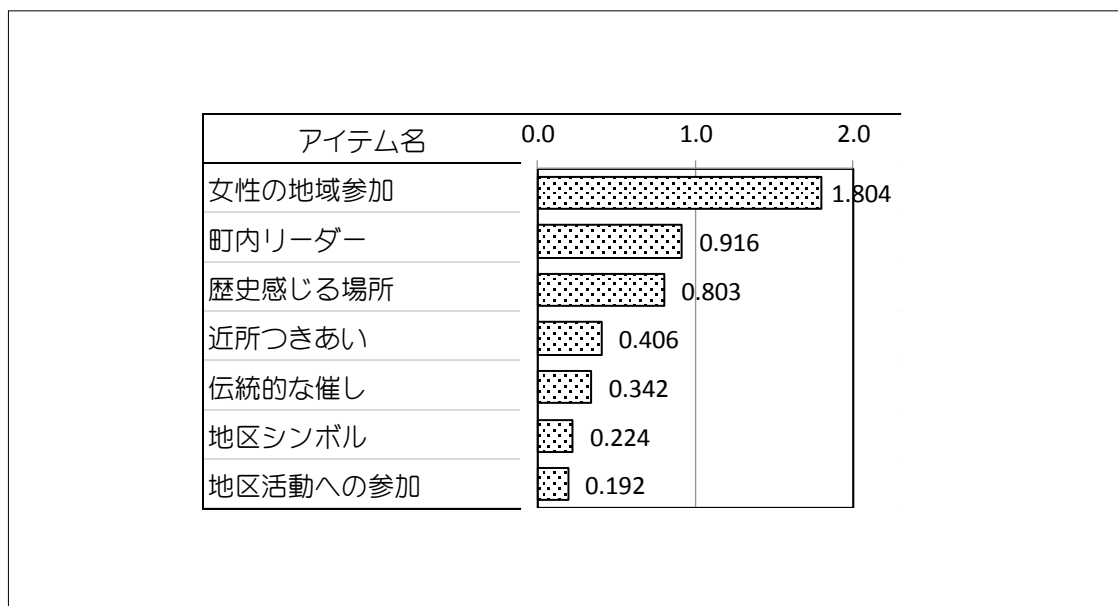


図 24 文化性に関わる数量化Ⅱ類によるレンジ

一方、総合的な満足度にマイナスに寄与しているものは、「女性の地域参加のしやすさ(不満)」(- 0.837)であり、他のカテゴリと比較して非常に強い関係性を示している。また、「歴史を感じる場所(不満)」(- 0.556)も比較的相関が認められる。

各アイテムのレンジをみると、「女性の地域参加のしやすさ」(1.804)が最も大きく、総合評価に大きな影響を与えている。次いで、「町内のリーダーの存在」(0.916)「歴史を感じる場所」(0.803)が大きなレンジを示している。

(5) 総合評価

生活環境全体の総合評価を外的基準とし、各視点の総合評価を説明変数(アイテム)として、数量化Ⅱ類による分析を行った結果を表11に示す。第一軸の寄与率が0.763と十分に高い

表 11 総合的な生活環境評価に関わる寄与率

相関比	寄与率	累積寄与率
0.502	76.3%	76.3%
0.156	23.7%	100.0%

ため、カテゴリースコアならびにレンジの算出は第一軸についてのみ示している。なお、各選択肢(カテゴリー)のスコアがマイナスであるほど、総合的にはプラス評価に寄与することになっている。

各カテゴリーのスコアを図25に示す。また、各アイテムのレンジは図26に示す。

カテゴリースコアを見ると、総合満足度に最もプラスに寄与しているカテゴリーは「利便性総合(満足)」(- 0.693)であり、次いで「文化性総合(満足)」(- 0.454)、「安全性総合(満足)」(- 0.430)である。一方、「自然性・快適性総合(満足)」は他の評価尺度と比較すると総合評価に対するプラスの影響は小さい。

一方、マイナス側の寄与については「安全性(不満)」(0.515)が最も強く影響しており、次いで「自然性・快適性総合(不満)」(0.413)である。

アイテムごとのレンジをみると、「利便性」(1.128)が最も大きく、次いで、「安全性」(0.945)、「自然性・快適性総合」(0.826)となっている。「利便性」は、プラス側の場合に総合評価のプラス側に比較的大きな影響を及ぼしているのに対して、「自然性・快適性総合」はマイナス側の場合に総合評価のマイナス側に比較的影響を与えていることがわかる。

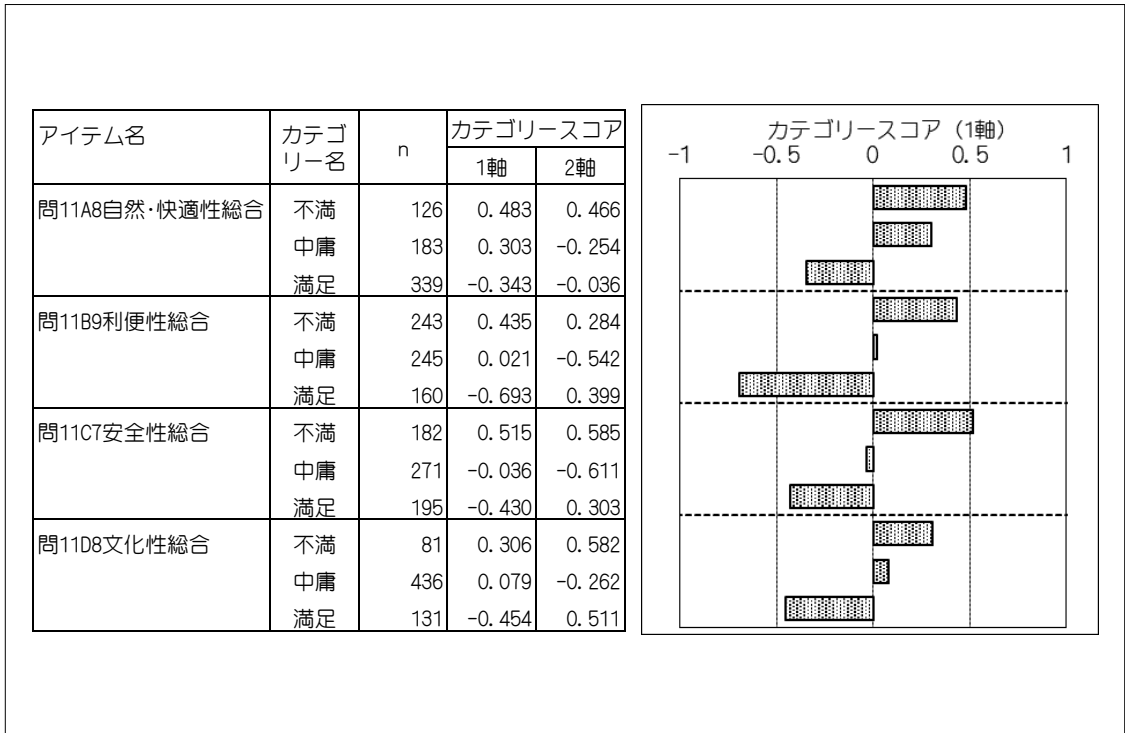


図 25 生活環境総合評価に関わる数量化Ⅱ類による分析結果

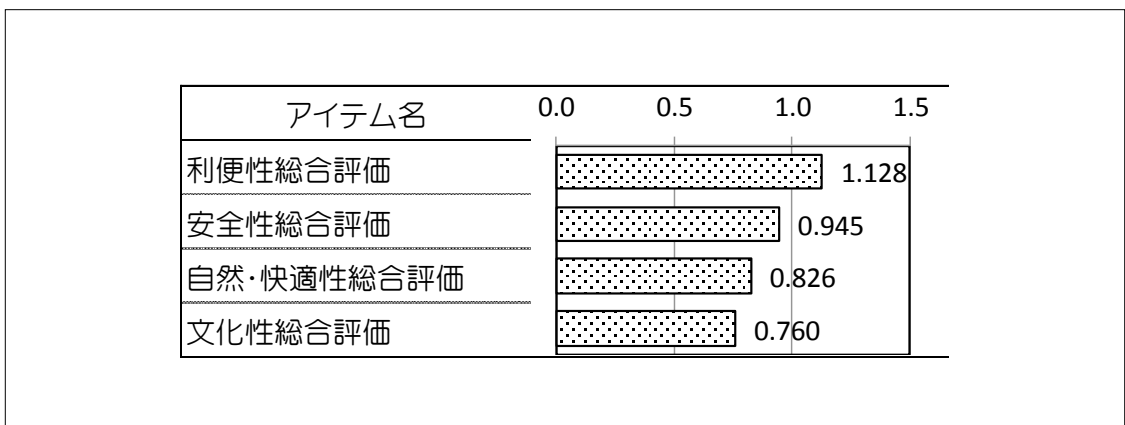


図 26 生活環境総合評価に関わる数量化Ⅱ類によるレンジ

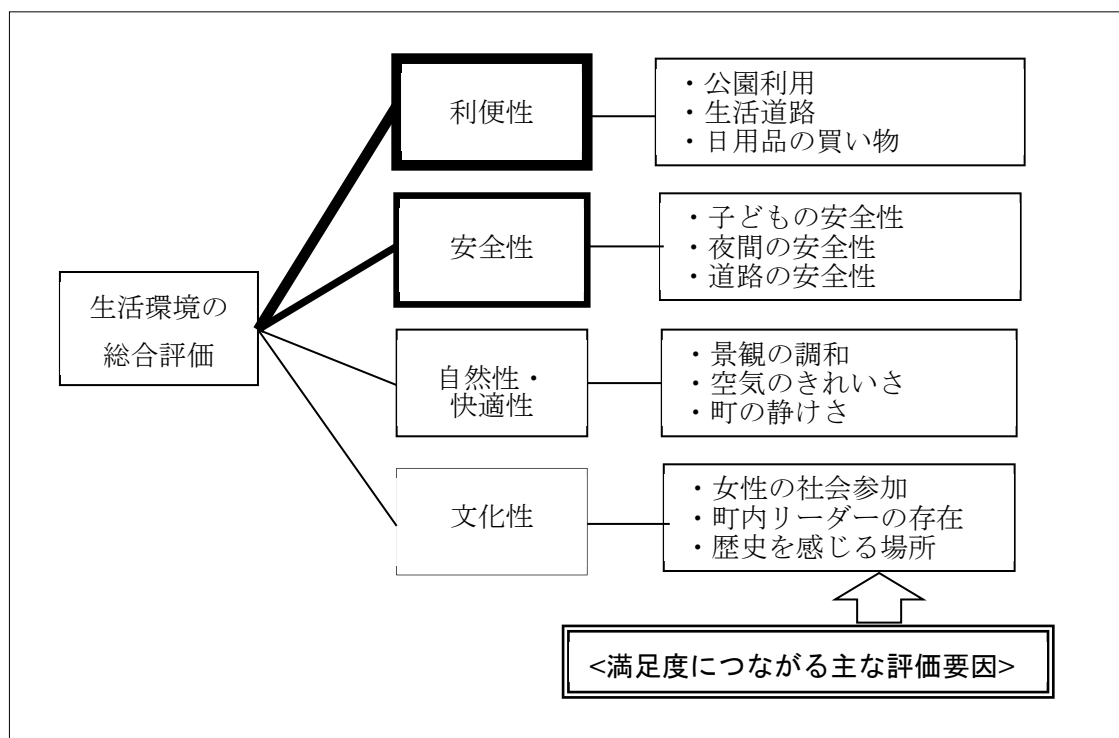


図 27 生活環境評価の主要要因

(6) まとめ

以上示した数量化Ⅱ類に基づく分析結果から、総合的な満足度に強い影響を及ぼしている要因を整理すると、図 27 のようにまとめられる。

カテゴリーカスコアのレンジから判断すると、生活環境の総合評価に最も影響しているのは「自然快適性にかかわる総合評価」であり、さらにこの評価に影響を及ぼしている主な要因は、「景観の調和」「空気のきれいさ」「町の静けさ」である。総合的な満足度としては、次いで、「文化性にかかわる総合評価」があげられ、「文化性の総合評価」には、「女性の地域参加」「町内のリーダーの存在」「地区のシンボル」が影響している。「利便性にかかわる総合評価」と「安全性にかかわる総合評価」は、全体の総合評価には大きな影響は及ぼしていないことが明らかとなった。

2.5 町への愛着度

地区および町への愛着度を示す指標として、過年度調査を参考として、「地区に一員として誇り」「地区への愛着」「地区との一体感」「町の一員としての誇り」「町への愛着」の 5 項目を設定した。

5 点満点の評価点を、「非常にそう思う」を 2 点、「まったく思わない」をマイナス 2 点として換算し、図化する。(図 28、29)

最も点数が高い項目は「地区への愛着度」であり、次いで「町への愛着」もプラスとなっ

ている。一方、「地区の一体感」については評価が低い。

性別にみると、「地区への一体感」や「町への一体感」は男性の方が「非常にそう思う」と回答している人の割合が女性よりもやや高い。(図 30)

年齢別にみると、全体として 20 歳代および 70 歳以上ではいずれの項目も「そう思う」割合が比較的高く、30 歳代から 60 歳代は、やや低い傾向がみられる。10 歳代は回答者数が少ないものの、いずれの項目に対しても評価が高いことが特徴的である。(図 31)

次に、5 つの項目の評価を 5 段階から 3 段階に集約したうえで、因子分析(バリマックス回転)を行い、愛着度に関わる因子の抽出を行った。表 12 には、バリマックス回転後に抽出された 3 つの因子の寄与率を示している。また、表 13 には、各因子に対する因子負荷量を示している。各因子の寄与率は 28% から 22% であり、必ずしも高くないが、表 13 からは、第一因子として「居住地区への帰属意識」、第二因子として「町に対する帰属意識」、第三因子として「社会への愛着意識」が抽出されたと分析できる。

累積寄与率が合計で 50% を超える第一因子と第二因子の二軸上で、5 つの評価項目をプロットすると、図 32 のようになる。

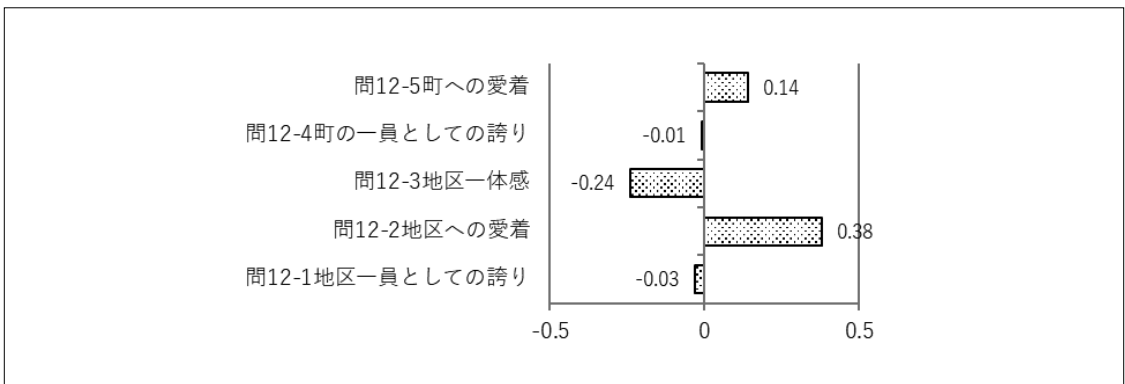


図 28 町への愛着度の評価結果

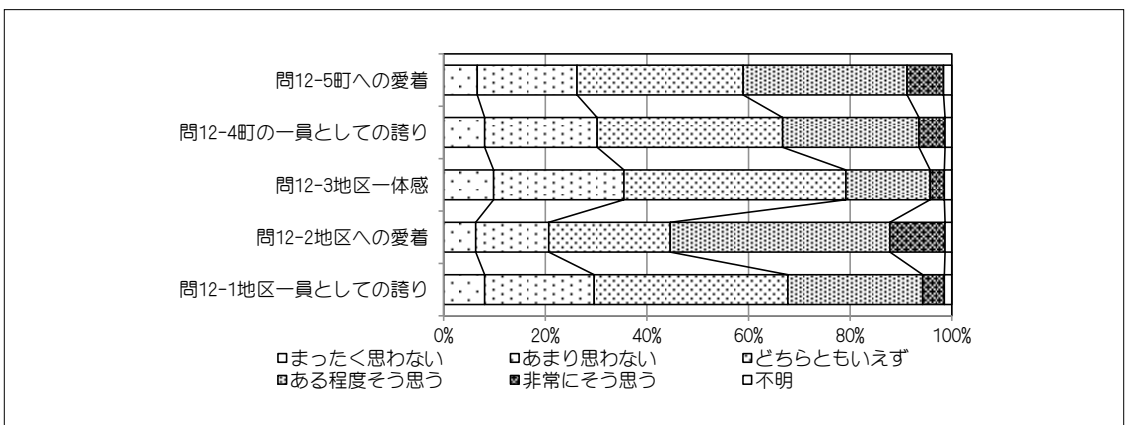


図 29 町への愛着度

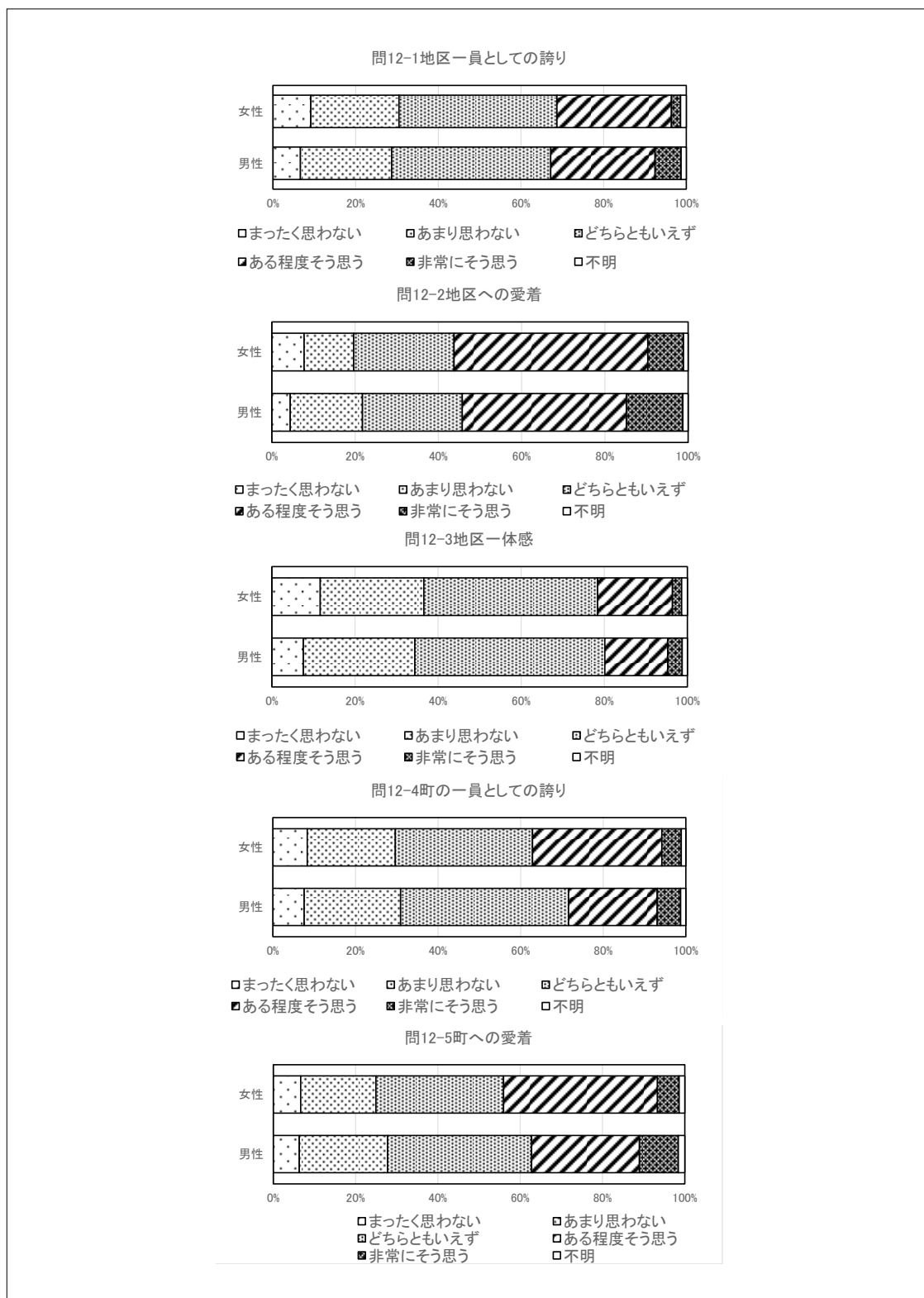


図 30 性別にみた町への愛着度

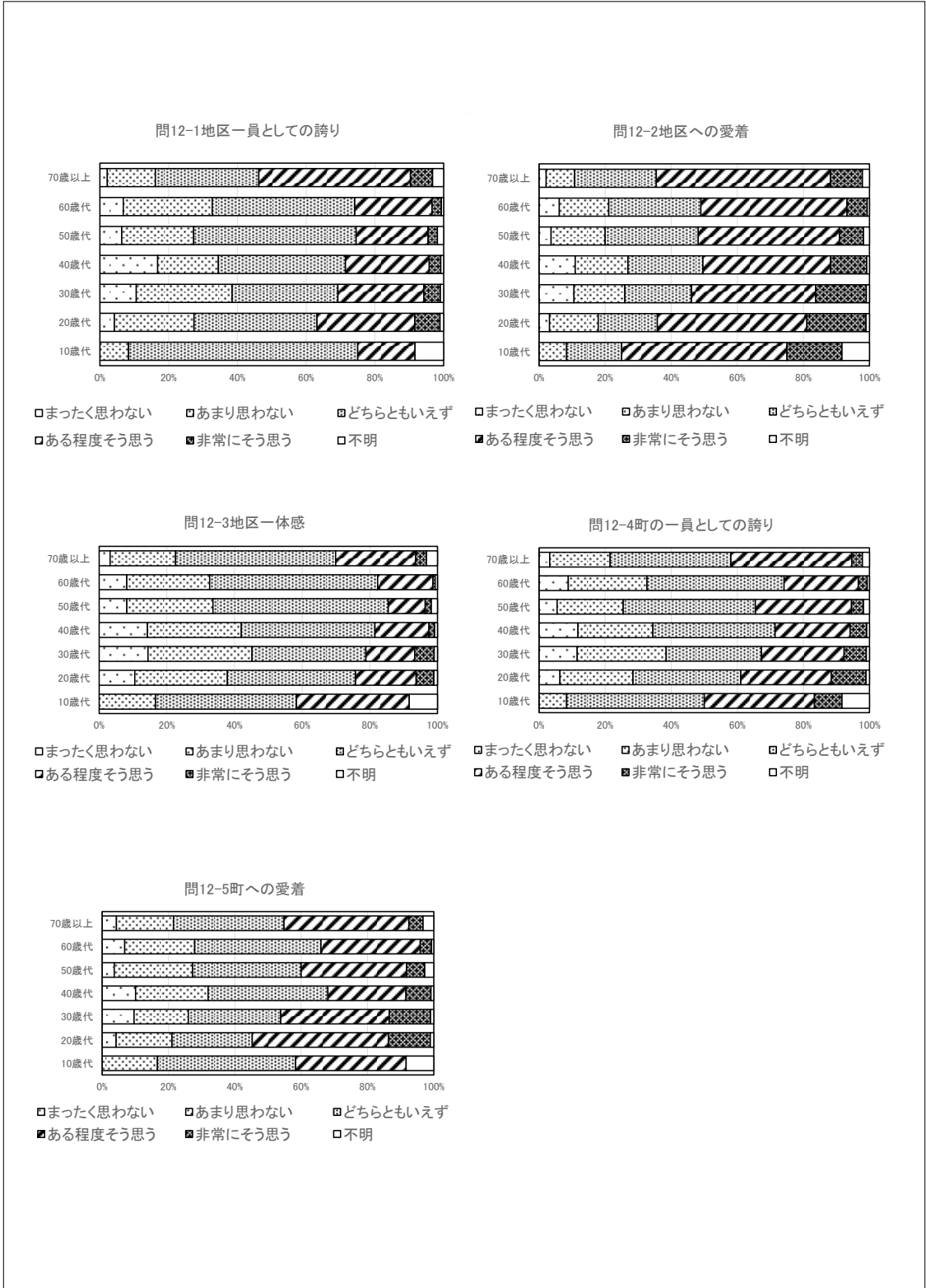


図 31 年齢別にみた町への愛着度

表 12 愛着度に関わる因子の寄与率

因子No.	二乗和	寄与率	累積
1	1.40	27.98%	27.98%
2	1.33	26.54%	54.52%
3	1.10	22.04%	76.56%

表 13 愛着度に関わる因子負荷量

	因子1	因子2	因子3
地区の人たちとの一体感	0.681	0.351	0.266
地区の一員としての誇り	0.646	0.305	0.472
町全体の一員の実感	0.463	0.710	0.245
町全体への愛着	0.280	0.689	0.555
地区への愛着	0.474	0.361	0.664

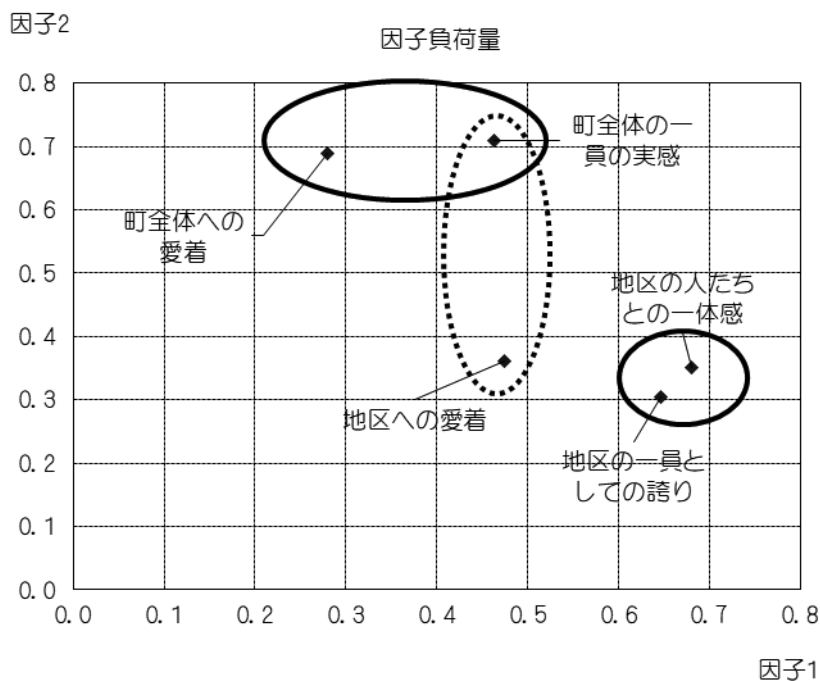


図 32 町の愛着度に関わる因子分析結果

2.6 まちづくりへの態度

まちづくりに対する意識や参画態度にかかわる因子を明らかにするため、過年度調査と同様に下記の13項目について、「5. そう思う」から「1. そう思わない」までの5段階評価を求めた。(図 33)

< 設問 >

- ① まちづくりを通して、この地区を魅力的にしていく責任を感じている
- ② まちづくりの世話役を頼まれたら引き受けてもよいと思う
- ③ まちづくり活動に積極的に関わるのは煩わしい
- ④ まちづくりを行うのは、主として行政の責任である
- ⑤ まちづくりを行うのは、主として住民の責任である
- ⑥ 行政は、もっと積極的にまちづくりを推進するべきである
- ⑦ 住民は、もっと主体的にまちづくりに参加するべきである
- ⑧ 行政は、まちづくりを進めるのに必要な資金や人材を豊富に抱えている
- ⑨ まちづくりに関して、住民が努力すればそれだけ成果が上がる
- ⑩ 他の地区よりも優先して生活環境の整備をしてほしい
- ⑪ 自分の居住地区よりも遅れている地区を優先してもよい
- ⑫ 自分の居住地区のまちづくりのために寄付や援助を求められれば協力する
- ⑬ 美浜町全体のまちづくりのために寄付や援助を求められれば協力する

「そう思う」との回答が最も多かったのは「行政は積極的にまちづくりを推進すべき」であり、次いで、「遅れている地区優先でもいい」「地区のための寄付や援助ができる」などである。一方、「行政は資金や人材が豊富」「世話役を引き受ける」については「そう思わない」との回答比率が高い。また、「まちづくりは行政の責任」と「まちづくりは住民の責任」はともに「どちらともいえない」と考える人が非常に多く、まちづくりの責任主体について明確な答えを持ち得ていない状況がうかがえる。

性別にみると、男性の方が「行政は積極的にまちづくりを推進すべき」「遅れている地区優先でもいい」との回答がやや多く、一方女性は、「まちづくりは煩わしい」「地区のために寄付や援助をする」に対して否定的な意見がやや多い。(図 34、35)

年齢別にみると、「行政は積極的にまちづくりを推進すべき」「住民が努力すれば成果はあがる」「地区のために寄付や援助をする」は10歳代を除いていずれの年代でも肯定的な意見が多い。その他の項目については、年齢層が上がるほど肯定的な意見が多くなる傾向が読み取れる。(図 36、37)

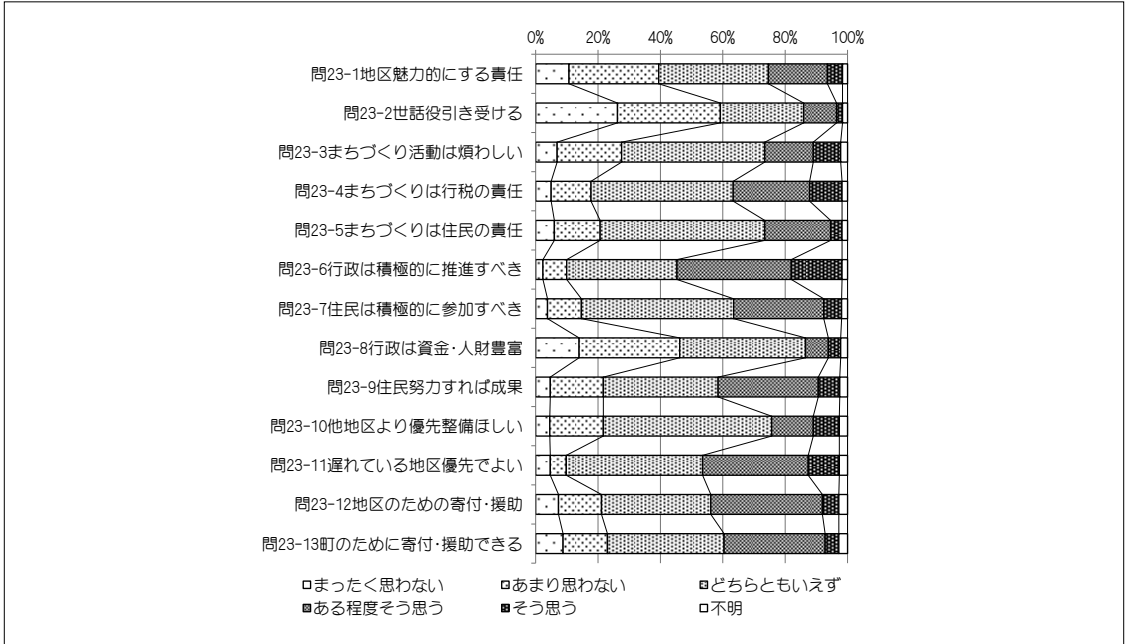


図 33 まちづくりへの態度

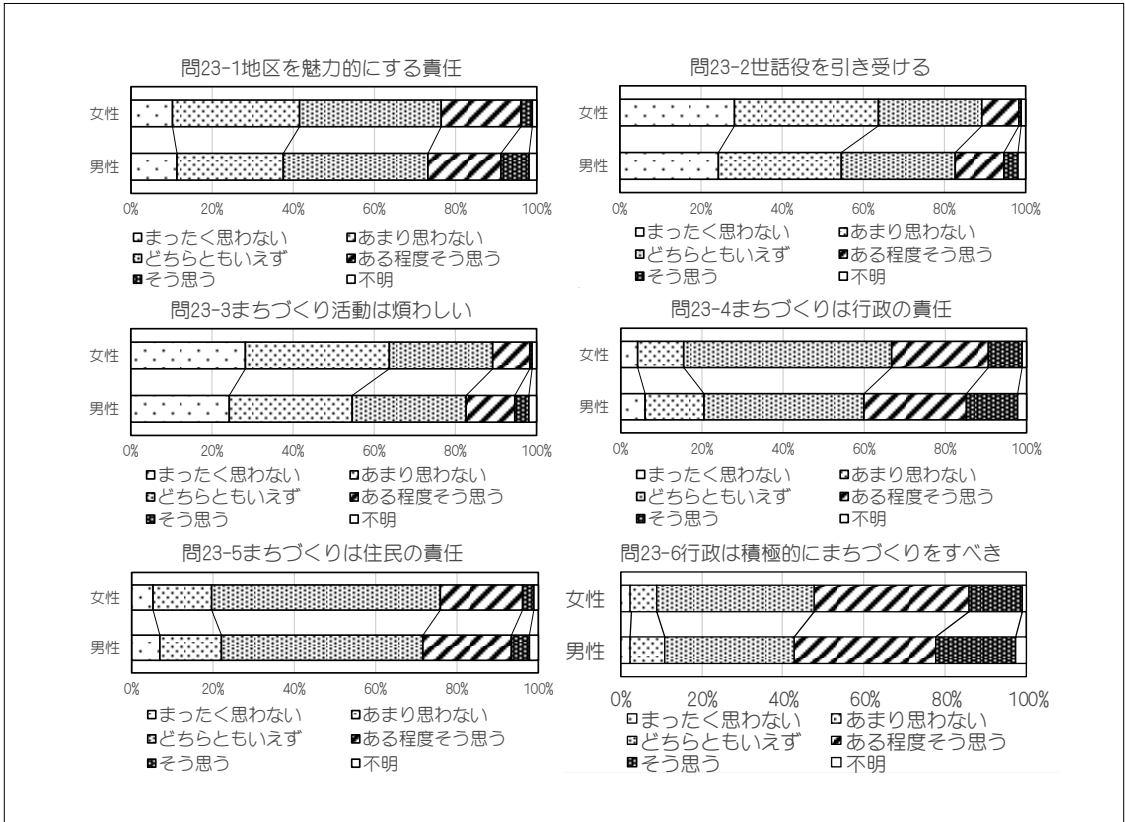


図 34 性別にみたまちづくりへの態度 (1)

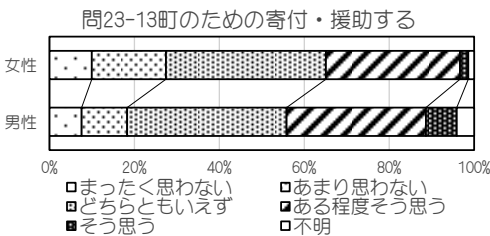
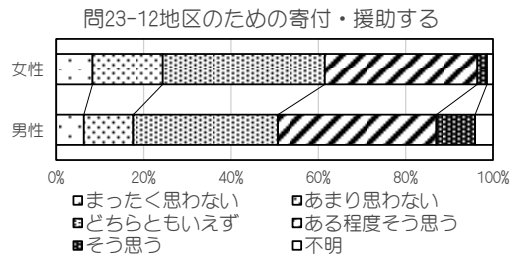
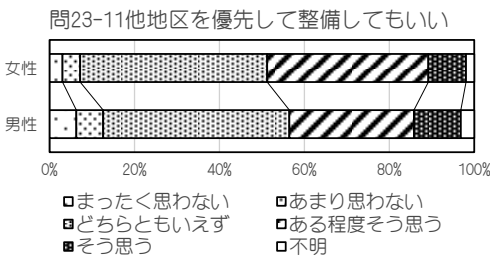
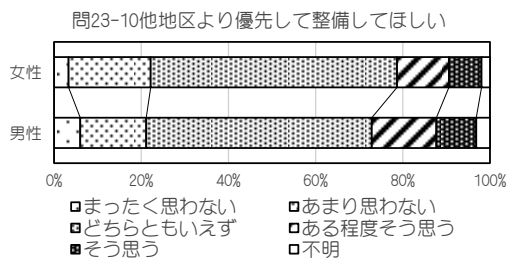
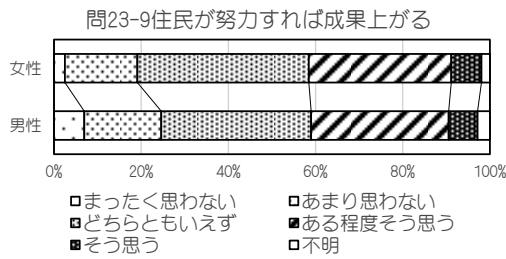
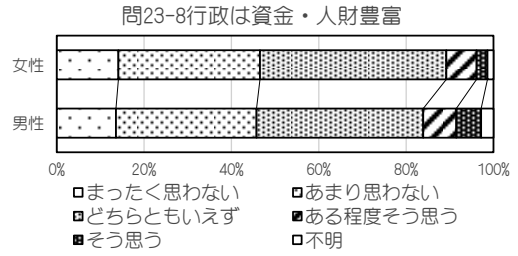
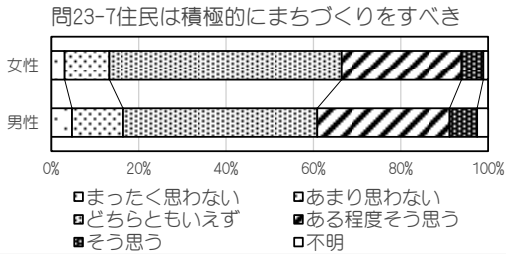


図 35 性別にみたまちづくりへの態度 (2)

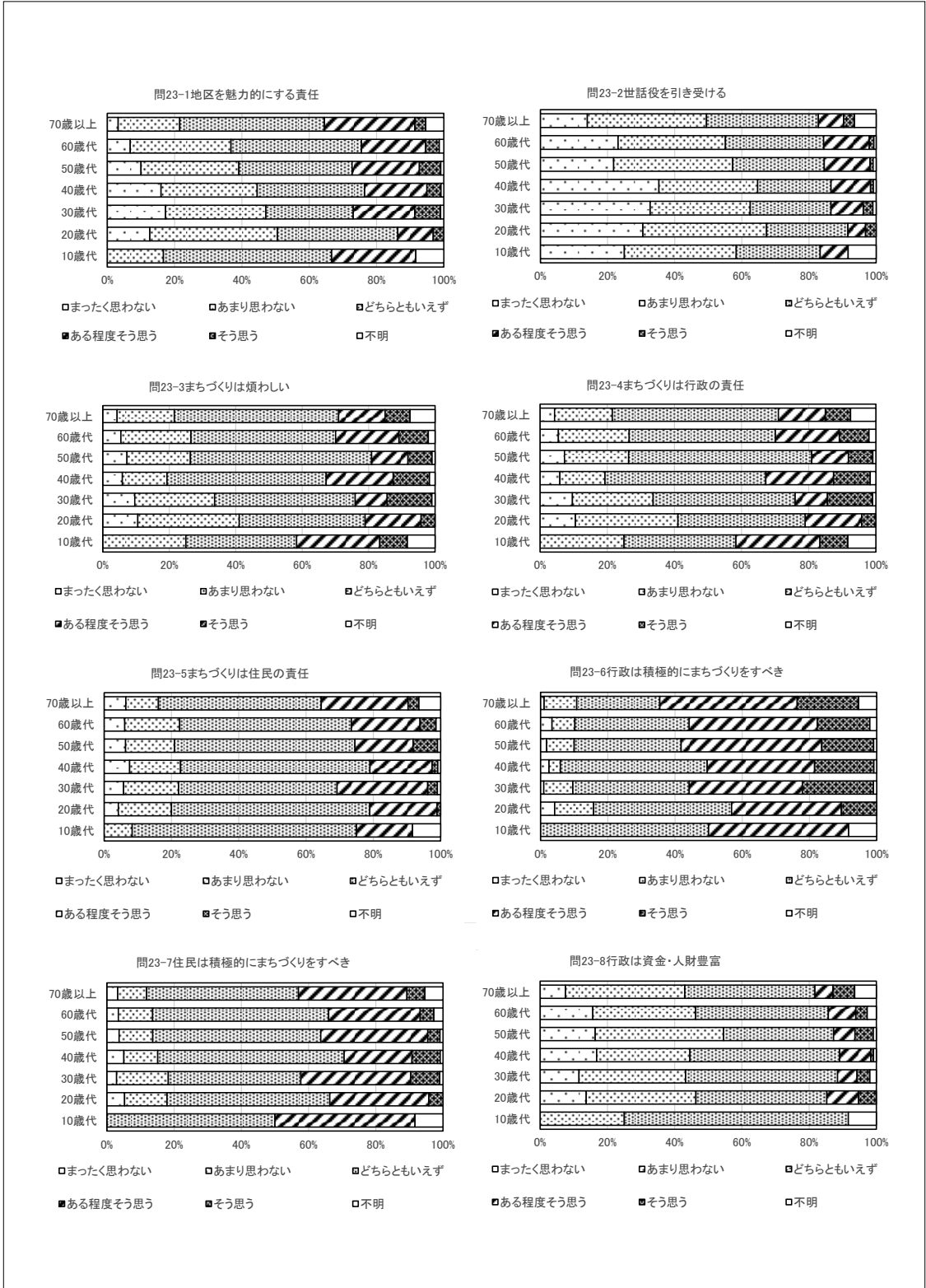


図 36 年齢別にみたまちづくりへの態度(1)

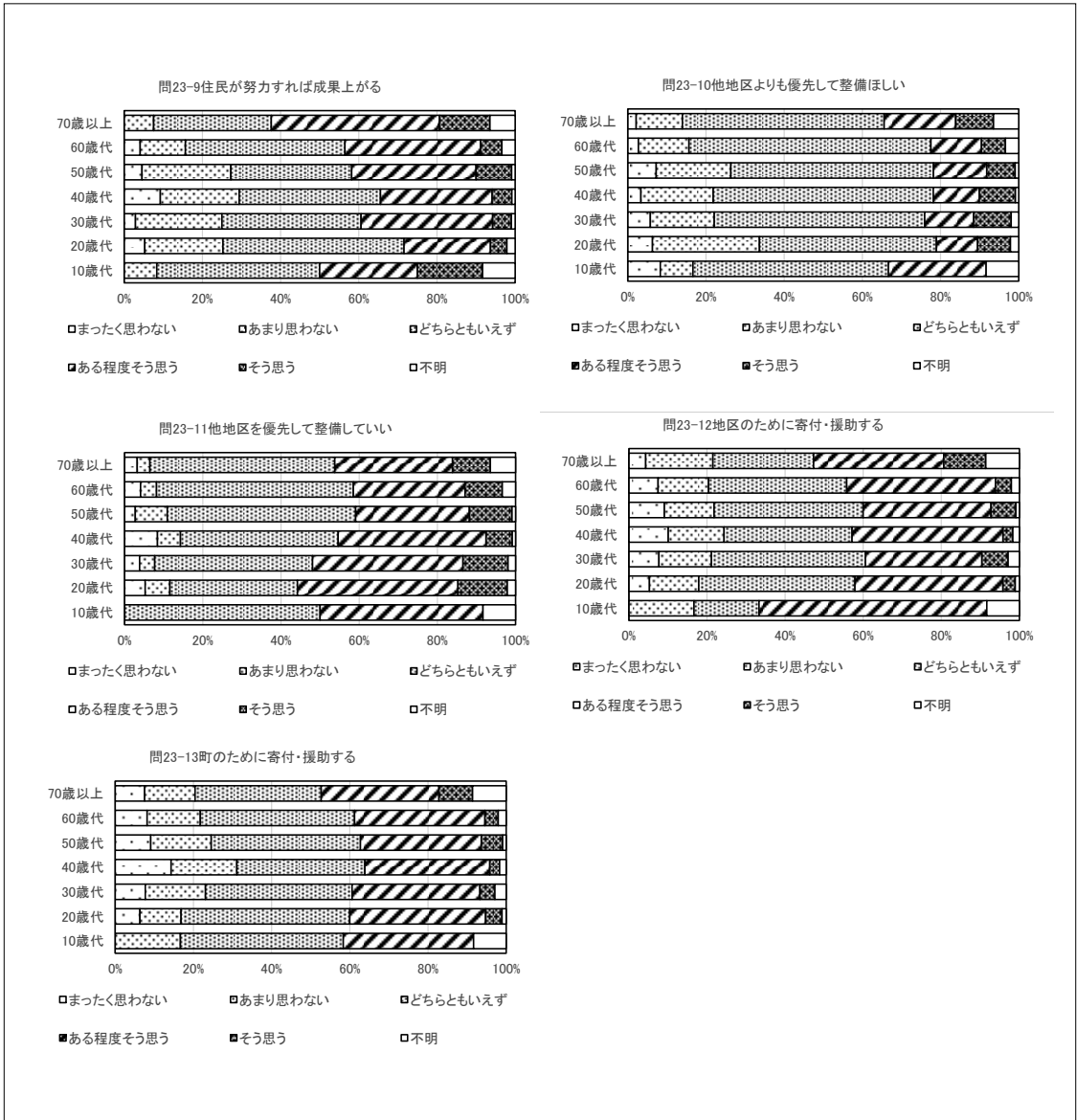


図 37 年齢別にみたまづくりへの態度 (2)

3. 過去 20 年間の調査結果の比較分析

筆者らは、1997 年以降、合計 4 回にわたって、美浜町を対象として住民意識調査を行ってきた。

ここでは、生活環境評価およびまちづくりへの態度に関する調査項目を選定し、評価構造の変化や安定性、経年的な動向などについて分析を行う。

表 14 には、過去の 4 回の調査時期、有効回収数などの概要を示す。調査方法は、いずれも住民基本台帳から無作為に 18 歳以上の住民を所定数抽出し、調査表を郵送配布、郵送回収した。

表 14 調査概要

	調査時期	配布数	有効回収数	有効回収率
第一回	1997年	1,000	492	49.2%
第二回	2001年	1,500	1,005	67.0%
第三回	2011年	2,100	909	43.3%
第四回	2019年	2,100	682	32.5%

3.1 生活環境評価構造の比較と安定性の評価

生活環境を示す項目としては、上述のように WHO の考え方などに基づいて、「自然快適性」「利便性」「安全性」「文化性」の4つの分野を設定し、それぞれの分野ごとに、6から8つの評価項目および分野ごと総合評価、さらに、すべてを含めた総合評価について、5段階評価で回答を求めている。調査時期により、評価(調査)項目には若干の変動があるものの、全体としてはおおむね同じ項目について調査を行っている。

(1) 単純評価点平均の比較

5段階評価結果を、1点から5点までに得点化し、項目ごとに調査回答者全体の平均を求めて示したものが図38である。

設問の表現方法が調査年によって若干異なるため、その影響も考慮する必要があるが、全体として、1997年から2019年までの約22年間に評価点が低下している項目が少なくない。

① 自然性・快適性

評価点の低下が顕著であるのは、「空気のきれいさ」および「自然の豊かさ」である。特に「自然の豊かさ」については、1997年では4.24、2001年でも4.28であったのに対して、2011年には3.48と大きく低下しており、2019年も3.60と低い。これは、この間の開発、特に太陽光パネルの各署での設置などが影響している可能性がある。一方、「水辺のきれいさ」は1997年が2.30と非常に評価が低かったが、毎年少しずつ評価が改善され、2019年には2.84となっている。自然性・快適性の総合評価は2011年および2019年には少し低下している。

② 利便性

評価点の低下が顕著であるのは、「日用品の買い物」であり、1997年が3.24であったのに対して、2019年は2.86まで低下している。この背景としては、町内の商店が減少した

ことに加えて、高齢化の進展によって遠距離の買い物が困難になってきたケースが少なくないことが要因として考えられる。「医療施設」についても、1997年の3.46が2019年には2.95と0.51ポイントも低下している。一方、「スポーツ施設やする機会」「公園利用」などは評価が高くなっており、過去20年間での施設整備の効果が表れていると考えられる。利便性の総合評価は、過去20年間でほとんど変化していない。

③ 安全性

評価点の低下が顕著であるのは、「津波高潮の安全性」であり、1997年には3.84とかなりの高評価であったのに対して、2011年には2.41に急落し、2019年においても2.57と低い評価である。これは、2011年3月の東日本大震災を契機として住民の関心が高まり、さらに、南海トラフ大地震の危険性とも相まって不安が大きくなっていることを示している。「土砂崩れの安全性」も1997年の3.84が2019年には3.24と0.6ポイント低下しているが、近年の気象変動に伴う集中豪雨などがその背景要因と考えられる。「子どもの安全性」は過去20年間で大きな変化はない。また、安全性の総合評価はほぼ横ばいである。

④ 文化性

評価点の低下が顕著であるのは、「伝統的な催し」であり、1997年には4.22と非常に高評価であったのに対して、2019年には3.38と、0.81ポイントの大幅な低下となっている。また、「歴史を感じる場所」も評価がやや低下している。一方、「地区のシンボル」ならびに「町内のリーダー」は20年間で評価がやや高くなっている。文化性に関わる総合評価は、1997年および2001年は2.4から2.5程度であったが、2011年には3.05と0.5ポイント程度高くなり、2019年も同様の結果となっている。

いくつかの項目において評価の低下が明確であるのに対して総合的な評価が逆に向上している要因としては、後述する数量化Ⅱ類の結果から推測できるように、文化性に大きな影響を及ぼしている項目が変化してきていることが考えられるが、必ずしも明確に説明できるものではない。

⑤ 総合評価

図39に総合評価の経年動向をグラフ化している。自然性・快適性は1997年には3.62であった評価点だが2019年には3.34まで低下している。一方、「利便性」「安全性」「文化性」はいずれも横ばいからやや上昇傾向が読み取れる。全体の総合評価についても、1997年の2.85が2019年には3.09とわずかながら評価が高くなっている。

全体として、個々の項目では、過去20年間に評価がかなり低下した項目がみられるのに対して、総合的な評価は自然性・快適性を除いてむしろ向上していることが大きな特徴である。この正確な要因分析は現段階ではできておらず、今後の課題である。

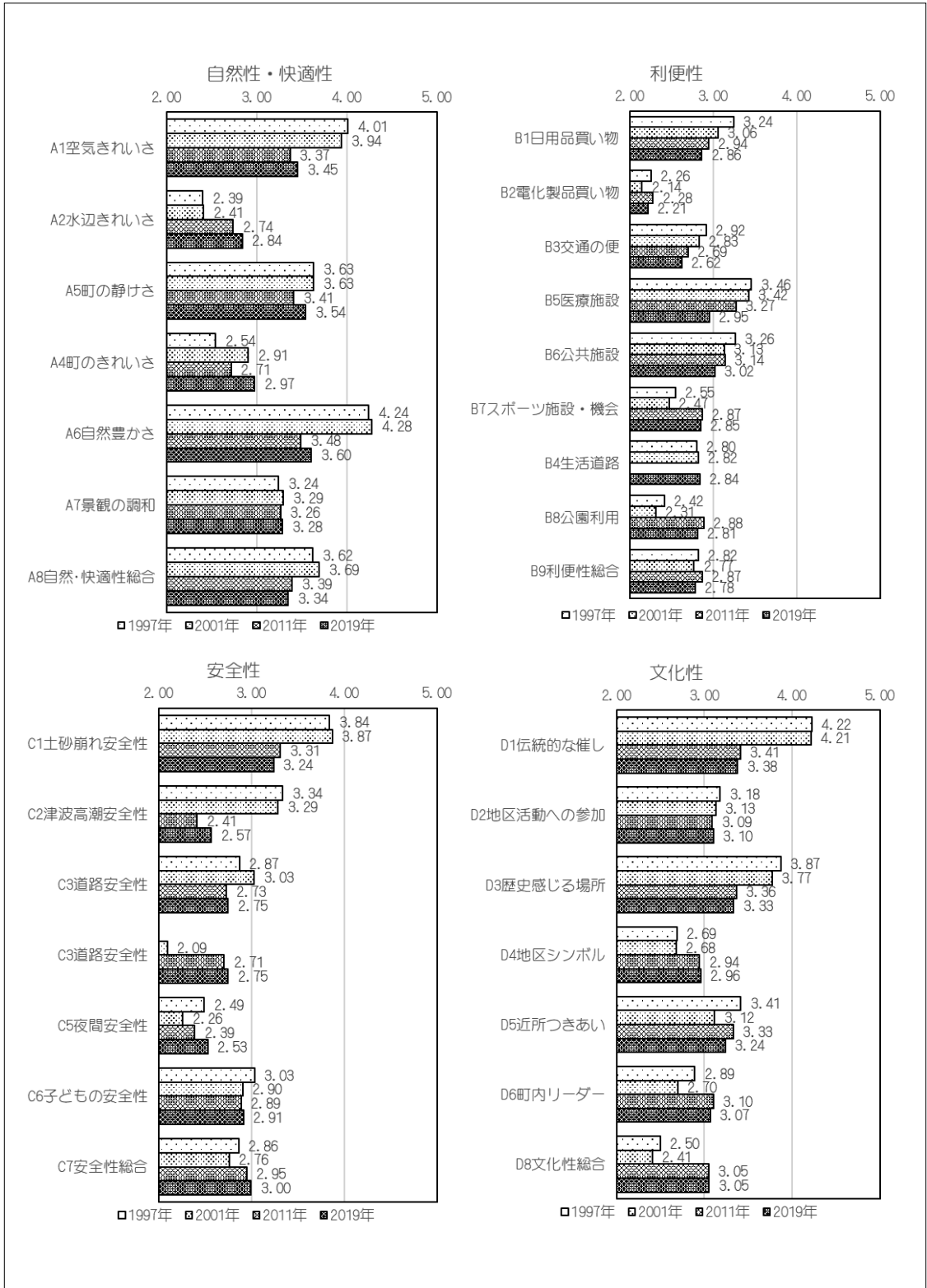


図 38 生活環境評価の経年動向(1)

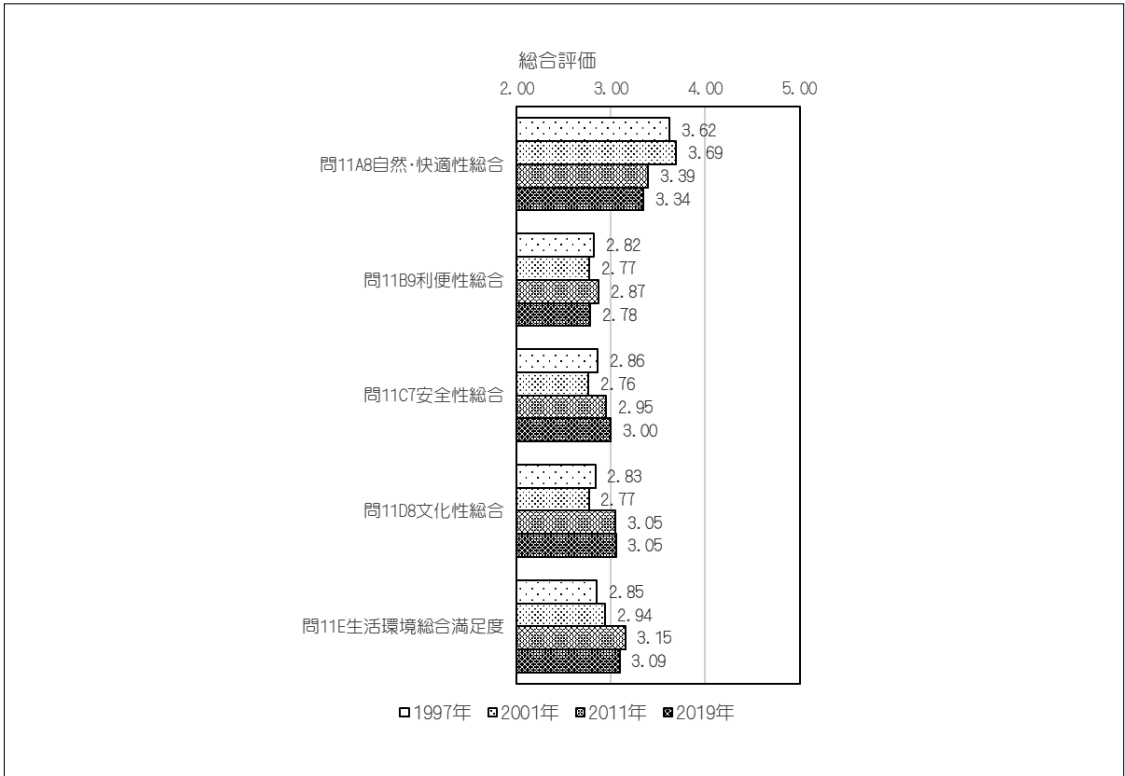


図 39 生活環境評価の経年動向 (2)

(2) 数量化Ⅱ類を用いた分野ごとの評価構造の経年変化

過去4回のデータに基づいて、数量化Ⅱ類手法を用いて、自然性・快適性、利便性、安全性、文化性の4分野それぞれについて、総合評価に大きな影響を及ぼしている要因(項目)を明らかにするとともに、生活環境全体の総合評価に上記4つの視点(分野)がどう影響しているかについても、分析を行った。

図40には、それぞれの視点(分野)ごと、および総合的にみて、レンジの大きい項目から順に並べて解析結果を表示している。レンジの大きな項目ほど、その項目に対する高評価と低評価が総合的な満足度の高低に大きく影響していることを示すものである。また、図41には、図40に示す数量化Ⅱ類の分析結果として、相関日及び累積寄与率を示している。いずれの分析においても、判別式1の寄与率は60%から80%と高く、判別式1が、外的基準の分析結果として一定説明力を有していることが明らかである。

① 自然性・快適性

1997年では、「自然豊かな場所が多い」が最もレンジが大きく、次いで「景観の調和」である。「景観の調和」は、1997年には第2位、2001年では第3位であったのに対して、2011年には最もレンジが大きく影響力が高い項目となった。この傾向は2019年も同様である。全体として、2011年と2019年ともに、「空気のきれいさ」が第2位、「町の静けさ」

が第3位と、ほぼ同様の分析結果となっている。このことから、美浜町の住民にとって、自然性・快適性を評価する上では、「景観の調和」「空気のきれいさ」「町の静けさ」が総合評価を分ける重要な項目であることが示されている。

② 利便性

1997年には第1位であった「日用品の買い物」は、2011年には第2位、2019年には第3位となり、総合評価に与える影響度は徐々に低下してきている。一方、「公園利用」に関わる評価項目は、1997年には第2位であったが、2011年および2019年にはともに第1位となり、「利便性の総合評価」に大きな影響を及ぼしている。「日用品の買い物」は単純評価点の平均は毎年緩やかに低下してきており、その意味での利便性の低下は明らかであるが、その傾向はいわば趨勢であり、評価が低い回答者にとってもある意味であきらめに近い受け止められ方をしていることが推測できる。一方、身近に利用できる公園の有無は、気持ちの上でのゆとりや軽い休憩・レクリエーションの空間として一定評価され、「利便性の総合評価」の向上につながっているとみえる。この分析については今後の課題である。

③ 安全性

1997年に第1位であった「夜間の安全性」は、2001年以降は第2位となったものの、一貫して、「安全性の総合評価」に大きな影響を及ぼしている。「子どもの安全性」は、2001年以降、第1位を占め、そのレンジは第2位以下と比較してかなり大きいことから、近年の子どもを取り巻く不安材料が、安全性の懸念に大きく寄与していることがうかがえる。同時に、前出のカテゴリスコアを見ると、「子どもの安全性」に対して満足している場合には、総合的な安全性にも満足していることがわかる。一方、「土砂崩れの安全性」や「津波高潮の安全性」については、単純評価平均は2011年以降顕著に低下しているにも関わらず、「安全性の総合評価」にはほとんど影響を及ぼしていないことが特徴的である。このことは、「安全性の総合評価」をする際には、いつ起きるかもしれない在外よりも、毎日の生活の上での安全性が強く影響していることを示している。

④ 文化性

最も大きな特徴は「女性の地域参加」が1997年以降一貫して、最もレンジが大きく、「文化性の総合評価」に最も影響していることである。特に2019年では、「女性の地域参加」のレンジは1.804と、第2位の「町内リーダー」の0.916の2倍近い値となっている。前出のカテゴリスコアを見ても、「女性の地域参加」に満足している回答者は「文化性の総合評価」にも強く満足し、逆に「女性の地域参加」に不満な回答者は「文化性の総合評価」にも強く不満であることが示されている。「町内のリーダー」は、1997年及び2001年には「まとめ役のリーダー」として聞いているが、レンジは第4位から第5位艇であったが、2011年以降は第2位と重要な要因となってきた。

⑤ 総合評価

生活環境全体に対する評価については、「利便性の総合評価」は1997年と2019年に第1位となり、「自然性・快適性の総合評価」は2001根と2011年に第1位であった。一方、「安全性の総合評価」は1997年には第4位と最も低かったのに対して、2019年には第2位となり、安全性に対する住民の意識が高まってきていることを示唆している。

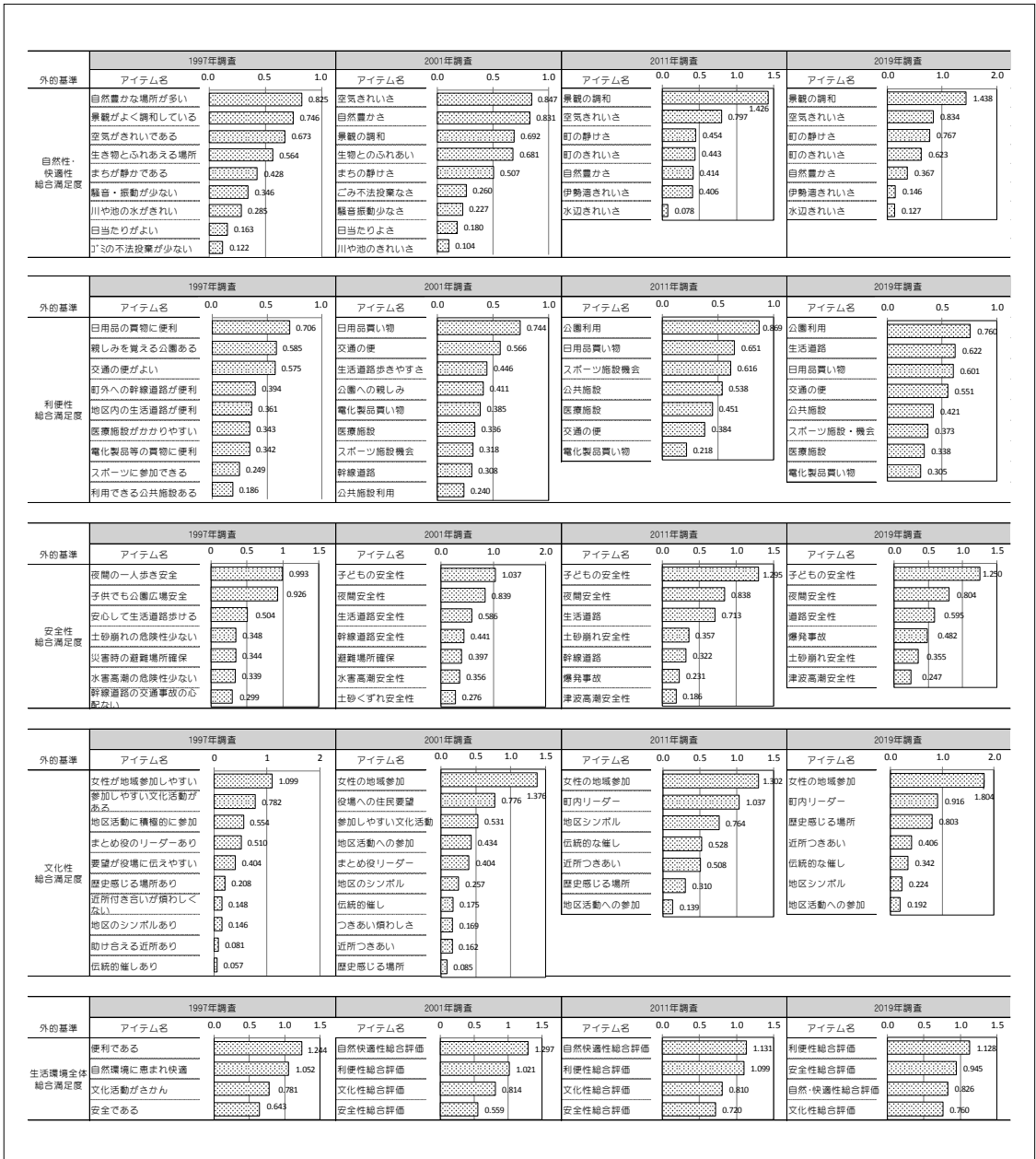


図 40 生活環境評価に対する数量Ⅱ類による分析結果(レンジ)

表 15 数量化Ⅱ類による生活環境評価分析の相関比と寄与率

	1997年調査			2001年調査			2011年調査			2019年調査			
	相関比	寄与率	累積寄与率	相関比	寄与率	累積寄与率	相関比	寄与率	累積寄与率	相関比	寄与率	累積寄与率	
自然環境・快適性	判別式1	0.535	83.8%	83.8%	0.557	85.1%	85.1%	0.355	72.6%	72.6%	0.373	69.3%	69.3%
	判別式2	0.104	16.3%	100.0%	0.097	14.9%	100.0%	0.134	27.4%	100.0%	0.165	30.7%	100.0%
利便性	判別式1	0.595	77.4%	77.4%	0.579	78.7%	78.7%	0.433	72.6%	72.6%	0.502	72.9%	72.9%
	判別式2	0.174	22.6%	100.0%	0.157	21.3%	100.0%	0.163	27.4%	100.0%	0.187	27.1%	100.0%
安全性	判別式1	0.617	80.8%	80.8%	0.587	74.8%	74.8%	0.525	69.2%	69.2%	0.635	72.6%	72.6%
	判別式2	0.147	19.2%	100.0%	0.198	23.7%	100.0%	0.234	30.8%	100.0%	0.240	27.4%	100.0%
文化性	判別式1	0.570	66.2%	66.2%	0.561	67.0%	67.0%	0.455	59.6%	59.6%	0.479	59.9%	59.9%
	判別式2	0.291	33.8%	100.0%	0.276	33.0%	100.0%	0.308	40.4%	100.0%	0.321	40.1%	100.0%
生活環境全体	判別式1	0.302	80.9%	80.9%	0.314	90.8%	90.8%	0.474	77.1%	77.1%	0.502	76.3%	76.3%
	判別式2	0.071	19.1%	100.0%	0.032	8.2%	100.0%	0.141	22.9%	100.0%	0.156	23.7%	100.0%

(3) まちづくりへの態度に関わる経年動向

前述の街づくりへの態度に関わる13項目について、5段階評価を3段階評価に集約したうえで、過去4回分の調査結果を整理したものが、図41である。また、5点満点で評価点としての平均値を求めたものが図42である。

「6行政は積極的に推進すべき」「7住民は積極的に参加すべき」「8行政は資金・人財豊富」「9住民努力すれば成果」「10他地区より優先整備ほしい」は、1997年と2019年を比較すると、「思う」との回答比率が顕著に減少していることが大きな特徴である。その代わりに、「どちらともいえない」という中庸の回答比率が大幅に増加している。

たとえば、「6行政は積極的に推進すべき」と「7住民は積極的に参加すべき」のように、考え方が相反する場合においても、いずれも「そう思う」との回答比率が減少し「どちらともいえない」が大幅に増加している。この結果を解釈するためにはさらなる分析が必要であるが、「どちらともいえない」の増加は、街づくりへの関心度が全体として低下していることを示唆するものであるとともに、住民・行政どちらかが一方的に努力すればいいのではなく、両者の役割分担や協力が必要だと考えていることを示しているともとらえることができる。同時に、「9住民努力すれば成果」と考える住民が、1997年には67.6%と約2/3を占めていたのに対して、2019年には40.0%と約28%も減少していることは、この20年間、住民の努力によってまちが活性化したというある種の成功体験が蓄

積されていないことの表れであるとも解釈できる。

「1 地区魅力的にする責任」を感じている人の割合は、この 20 年間で約 14% 減少しているが、「3 まちづくり活動は煩わしい」と考えている人の割合はむしろ微減傾向である。これらのことから、現在もまちづくりに対して一定の参画意欲を持った住民が存在しており、この人々に対する適切な働きかけや成功体験づくりが、今後の美浜町のまちづくりにとって極めて重要でかつ不可欠な取り組みであることを示唆している。

また、「10 他地区より優先整備ほしい」と考えている人の比率は 1997 年の 58.6% から 2019 年の 22.3% へと顕著に低下し、「1 遅れている地区優先でよい」と考える人の比率はほとんど変化していない。また、「13 町のために寄付・援助できる」との回答が、1997 年にはわずか 17.8% であったのに対して、2019 年には 37.9% と 2 倍以上に増加していることにも着目すべきである。古くから様々な局面で言われてきた、東海岸と西海岸というわが地区意識が徐々になくなり、美浜町全体でまちづくりを考える基盤が整いつつあると考えることもできる。

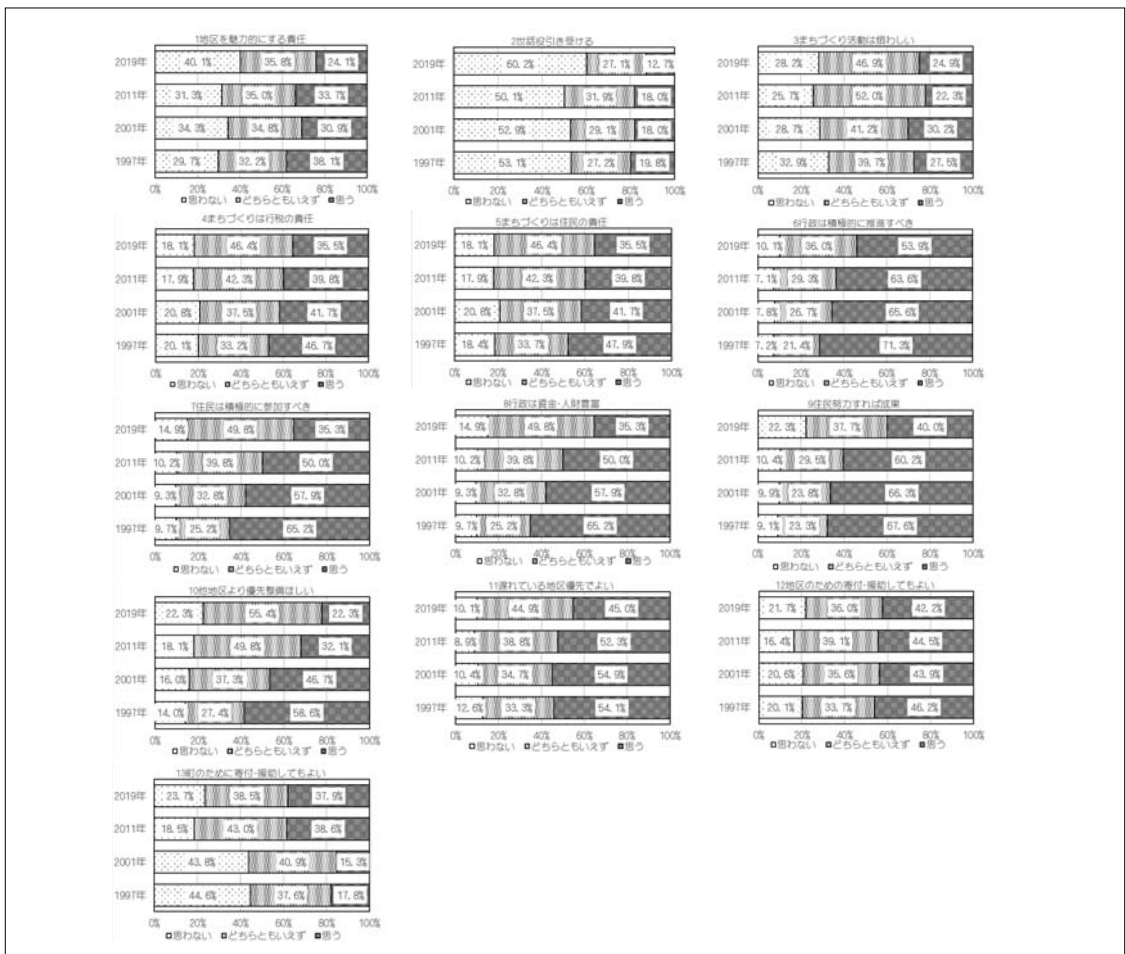


図 41 まちづくりへの態度の経年動向

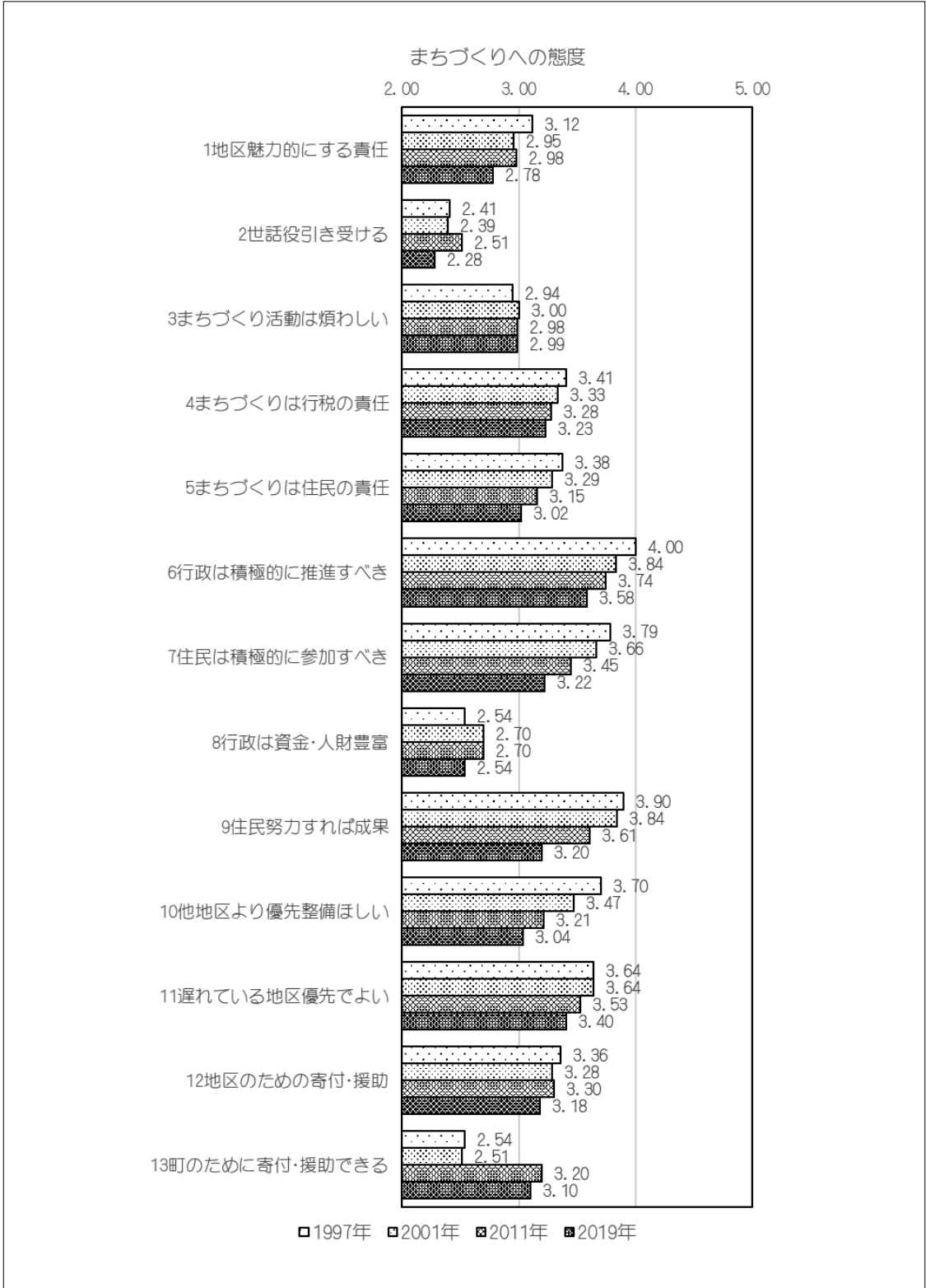


図 42 まちづくりへの態度の評価点の経年動向

1997年				2001年			
二乗和 (バリマックス回転)				二乗和 (バリマックス回転)			
因子No.	二乗和	寄与率	累積	因子No.	二乗和	寄与率	累積
1	2.36	18.17%	18.17%	1	2.13	16.42%	16.42%
2	1.56	11.98%	30.15%	2	1.56	12.02%	28.43%
3	1.52	11.72%	41.87%	3	1.52	11.68%	40.12%

	因子1	因子2	因子3		因子1	因子2	因子3
住民の参加	0.799	0.133	0.121	住民の参加	0.722	0.193	0.264
住民の責任	0.666	-0.119	0.127	住民の責任	0.600	0.177	-0.030
住民の努力	0.585	0.025	0.252	住民の努力	0.561	0.245	0.219
魅力的	0.558	0.096	0.231	世話役の引受け	0.536	0.270	-0.021
行政による推進	0.305	0.756	0.043	地区外の寄付	0.132	0.853	0.011
行政の責任	-0.138	0.676	-0.010	地区の寄付・援助	0.320	0.664	0.124
地区の寄付・援助	0.200	0.049	0.800	行政の責任	-0.311	-0.029	0.702
地区外の寄付	0.154	-0.009	0.719	行政による推進	0.166	0.099	0.699
世話役の引受け	0.454	-0.176	0.266	魅力的	0.419	0.242	0.117
積極的な係わり	-0.170	0.436	0.052	積極的な関わり	-0.333	-0.102	0.208
資金・人材	0.033	0.254	0.038	資金・人材	0.136	0.105	0.302
生活環境整備	0.374	0.400	0.142	生活環境整備	0.249	0.072	0.442
まちづくりの優先	0.274	0.202	0.351	まちづくりの優先	0.201	0.312	0.243

2011年				2019年			
二乗和 (バリマックス回転)				二乗和 (バリマックス回転)			
因子No.	二乗和	寄与率	累積	因子No.	二乗和	寄与率	累積
1	2.62	20.19%	20.19%	1	2.63	20.26%	20.26%
2	2.15	16.57%	36.76%	2	2.00	15.38%	35.63%
3	1.96	15.11%	51.86%	3	1.92	14.77%	50.40%

	因子1	因子2	因子3		因子1	因子2	因子3
7住民は積極的に参加すべき	0.791	0.232	0.251	7住民は積極的に参加すべき	0.770	0.226	0.220
1地区魅力的にする責任	0.637	0.240	0.080	1地区魅力的にする責任	0.683	0.255	0.053
5まちづくりは住民の責任	0.618	0.192	0.088	2世話役引き受ける	0.644	0.272	-0.024
2世話役引き受ける	0.612	0.296	-0.001	5まちづくりは住民の責任	0.603	0.171	0.091
9住民努力すれば成果	0.581	0.380	0.195	9住民努力すれば成果	0.572	0.168	0.175
12地区のための寄付・援助	0.274	0.931	0.120	13町のために寄付・援助できる	0.272	0.962	0.010
13町のために寄付・援助できる	0.328	0.844	0.110	12地区のための寄付・援助	0.347	0.848	0.026
4まちづくりは行税の責任	-0.062	0.047	0.761	4まちづくりは行税の責任	-0.076	-0.011	0.825
6行政は積極的に推進すべき	0.303	0.130	0.759	6行政は積極的に推進すべき	0.274	0.077	0.731
10他地区より優先整備ほしい	0.274	0.156	0.525	3まちづくり活動は煩わしい	-0.027	-0.119	0.399
3まちづくり活動は煩わしい	-0.047	0.055	0.433	8行政は資金・人財豊富	0.112	0.085	0.412
8行政は資金・人財豊富	0.240	0.085	0.394	10他地区より優先整備ほしい	0.232	0.036	0.451
11遅れている地区優先でよい	0.294	0.376	0.220	11遅れている地区優先でよい	0.355	0.280	0.283

図 43 因子分析によるまちづくりへの態度の因子抽出

② 因子分析手法による態度・意識の分析

過去4回のデータのうち、まちづくりへの態度に対して、因子分析を用いて因子の抽出を行った。分析手法としては、因子抽出については、重みなし最小二乗法、最尤法、主因子法の3方法、軸の回転についてはバリマックス直交回転法を用いたが、この3方法の結果に顕著な差がなかったため、本論文では、重みなし最小二乗法の結果を記載している。

回転後の上位3因子の距離と因子行列は図43に示すとおりである

調査時点により因子行列にはある程度の差が認められるものの、ほぼ共通の3つの因子が抽出されている。2019年の分析結果ベースとして、共通の各因子に大きく寄与している変数を見ると、第一因子は、「住民は主体的に参加すべき」「地区を魅力的にする責任」「世話役を引き受ける」「まちづくりは住民の責任」「住民の努力で成果があがる」などの因子負荷量が大きく、逆に「まちづくりは行政の責任」「まちづくり活動は煩わしい」などが小さいことから、「主体的自発度」と解釈することができる。第二因子は、「地区のために寄付・援助できる」「町のために寄付・援助できる」が大きいことから、「自発的金銭的負担度」と名づけることができる。第三因子は、「まちづくりは行政の責任」「行政は積極的に推進すべき」などの負荷量が大きいことから、「行政依存度」と名づけられる。

2011年も2019年とほぼ同様の因子抽出結果となっている。2001年および1997年は抽出された因子の順番がやや異なるものの、因子の意味としてはほぼ同様の結果となっている。

これらの分析結果からは、まちづくりに対する参加態度や行政と住民との責任分担などに関しては、主体的自発度、自発的金銭的負担度、行政依存度の3つの因子によって決定されていることが明らかとなった。この構造は調査時点を問わず、共通の安定した因子だと判断できる。

4. まとめ

1997年、2001年、2011年、2019年の4回にわたる美浜町住民調査結果から本研究で明らかになった点は以下のとおりである。

- ①生活環境に対する評価は1997年から2019年の22年間に大きく低下した項目が少なくない。特に、「自然の豊かさ」、「日用品の買い物」、「津波高潮の安全性」、「伝統的な催し」などは評価が大きく悪化している。
- ②一方、4分野ごとにみると、自然性・快適性に対する評価が低下しているが、利便性、安全性、文化性については、評価が横ばいないしは若干向上しており、全体に対する総合評価も微増傾向である。したがって、個別の項目に対する評価とは別に、総合的な満足度には大きな変化がなかったと判断できる。
- ③数量化Ⅱ類を用いて、生活環境に対する満足度分析を行い、カテゴリースコアのレンジから評価構造の分析を行った。自然・快適性の満足度に対しては、1997年あるいは2001年では「空気のきれいさ」「自然豊かな場所が多い」ことが大きな要因であったが、2011年以降は、「景観の調和」が重要な要因となっている。利便性については、1997年あるいは2001年では「日用品の買い物」が大きな要因であったが、2011年以降は、「公園の利用」が重要な要因となっている。安全性については、1997年は「夜間の一人歩き」

が最も影響を与えていたが、2001年以降は「子どもの安全性」が常に最も大きな影響要因となっている。文化性については、1997年以降一貫して、「女性の地域参加のしやすさ」が最も強く総合的な満足度に影響を及ぼしており、他の項目と比較して、スバ抜けて強い要因であることがわかる。生活環境の総合評価に最も影響しているのは「自然快適性にかかわる総合評価」と「利便性にかかわる総合評価」である。

- ④以上のように、生活環境に対する満足度に影響を及ぼす要因については時代とともに一定の変化を示しているが、評価構造に大きな変化は認められず、この手法を活用して、生活環境に対する住民意識を構造化することが可能であることを示している。
- ⑤まちづくりに対する意識・参画態度は、この20年間で大きく変化している。住民と行政の責任や役割りという観点からは両方の考え方に対する強い賛同の回答が減少し、全体として中庸的な回答の増加が顕著である。因子分析の結果からは、調査時期を問わず、主体的自発度、自発的金銭的負担度の、行政依存度の3つの因子が抽出されることが明らかとなった。

謝辞

本調査を行うにあたっては、美浜町企画政策課の方々に大変お世話になった。期して感謝の意を表したい。

引用・参考文献

- 1) 松本幸正ら(2003)「豊田市における市民意識調査を用いた生活環境に対する住民意識と改善要因の定量的分析」都市計画論文集 30.3、p.73-78、都市計画学会
 - 2) 小塚いすず(2009)「定住意識に影響を与える個人属性および地区環境の要因に関する研究」都市計画報告集 No.7、都市計画学会
 - 3) 千頭聡・唐沢かおり(1999)「生活環境評価とまちづくりの役割認識－美浜町まちづくり調査より－」知多半島の歴史と現在 No.10、校倉書房
 - 4) 千頭聡、川部竜士(2003)「まちづくりに対する態度及び生活環境評価の構造化」知多半島の歴史と現在 No.12、pp55-pp94、校倉書房
 - 5) 千頭聡・松岡崇暢・川部竜士(2012)「生活環境評価とまちづくり参画態度の構造化－美浜町住民意識調査を通じて」知多半島の歴史と現在 No.16、pp15-pp38、日本福祉大学 知多半島総合研究所
- 知多半島の歴史と現在 第24号